

大正の碩学，永澤六郎と『動物学雑誌』

川田伸一郎¹・下稲葉さやか²・平田逸俊³

¹ 国立科学博物館動物研究部

茨城県つくば市天久保4-1-1

E-mail: kawada@kahaku.go.jp

² 千葉県教育庁

千葉県千葉市中央区市場町1-1

³ 埼玉県本庄市

(2022年1月5日受領；2022年3月23日受理)

A Savant in the Taisho Era: Rokuro Nagasawa and “Dobutsugaku Zasshi”

Shin-ichiro Kawada¹, Sayaka Shimoinaba² and Hayatoshi Hirata³

¹ Department of Zoology, National Museum of Nature and Science,

4-1-1 Amakubo, Tsukuba, Ibaraki 305-0005, Japan

E-mail: kawada@kahaku.go.jp

² Chiba Prefectural Board of Education,

1-1 Ichiba-cho, Chuo-ku, Chiba, Chiba 260-8667, Japan

³ Honjo, Saitama, Japan

(Received 5 January 2022; accepted 23 March 2022)

Abstract Rokuro Nagasawa was a student in University of Tokyo under Professor Isao Ijima. He was involved in editing a zoological magazine named “Dobutsugaku Zasshi”, then the official journal of the Zoological Society of Tokyo, but his subsequent life is not well documented. We conducted bibliographic surveys to evaluate Nagasawa's achievements. He entered the University of Tokyo in 1907 and was in charge of editing “Dobutsugaku Zasshi” from 1911 to 1917. After that, he suddenly disappeared from the Zoological Society of Tokyo and moved to Vancouver, where he worked as an editor-in-chief of Japanese newspapers. He wrote many newspaper articles under the pen name of “Nanbokusei”. Prior to moving to Canada, he also wrote under the pen name of “N.S. Sei”. He returned to Japan before World War II, and worked as a high school teacher in Kyoto. He then moved to Hyogo prefecture and wrote and edited the local history of the area.

Key words: Tokyo Imperial University, Dobutsugaku Zasshi, Japanese Canadian, Japanese newspapers in Canada, Tairiku Nippo.

はじめに

日本の動物学は明治時代に主として東京大学（「帝国大学」・「東京帝国大学」と呼称が変遷する

が、本稿では「東京大学」とする）において近代化の道を歩んできた。この時代の動物学の動向を伺うことができる資料が、東京大学動物学教室の構成員を主体とした東京動物学会（現日本動物学会）の和文誌『動物学雑誌』である。学会誌という立場もありながら、明治時代においては欧米の生物学の移入が本格的に始まって間もなく、専門

家の論文発表の場のみならず、非専門の小中学校教師などに向けた動物学の普及も目的として掲げられていた(林, 2000)。大正時代に出版された『動物学雑誌』において編集の任につき、知識の普及に努めた人物に永澤六郎がいる。この名を博物史において重要と感じる方は、おそらく『動物学雑誌』へ寄稿された動物学のみならず様々な問題を扱った記事、特に1910年代の同雑誌巻頭に連載された国内外の生物学者の伝記シリーズによるところが一つではなかろうか。また永澤には日本産鯨類の学名を欧米の研究に基づいて整理した最初の人物という業績もあり(宇仁, 2016)、鯨類学においても名が知られている。ところが彼が自身の研究面で残した業績はないに等しく、その人物像について知られるところは少ない。例えば宇仁(2016)では永澤を「1910年当時に東京帝国大学動物学教室の教授を務め」と紹介しているが、このころ動物学教室に永澤という名の教授がいたという事実はなく(磯野, 1988)、誤情報が伝えられている。

著者の一人川田は明治から大正時代に横浜で活躍した貿易商、アラン・オーストン(Alan Owston)の業績を再評価する研究において、『動物学雑誌』に掲載されたオーストンの小伝(永澤, 1916)により永澤を認識し、同様に執筆された上記の『動物学雑誌』巻頭伝記シリーズによって関心を持つに至った。さらに川田(2016)において、オーストンについて書かれた出典不明の新聞記事をカナダのバンクーバー在住日本人に向けた記事と推測して取り上げ、文脈から執筆者が永澤であることを推定した。本稿ではこの不明新聞記事の詳細を検討する過程で、永澤に関する様々な情報が集積されたので、ここにまとめて、動物学史における一資料とすることを目的とする。

材料と方法

本研究の発端となった出典不明新聞記事は、国立科学博物館理工学研究部の鈴木一義氏が所有していたA4サイズのコピー(「新聞誌名及び年月日不明」と鉛筆書き有り)で、現在は著者の一人川田が所有している。タイトルとして「世間話」、著者の署名は「南北生」となっており、サブタイトルに「◇アラン・オーストン氏」(傍点ママ)とある(図1)。縦書き一行15文字、25行が四段という構成で、新聞のいわゆる「一面コラム」に相当す

るものと思われる。川田(2016)は「私の学生時代に、飯島教授の依頼を受けて、同氏の伝記を書き、生物学の専門雑誌に掲載したことがある」との記述があることから、この不明新聞記事が『動物学雑誌』にアラン・オーストンの小伝(永澤, 1916)を記した永澤六郎によるものである可能性が高いとしている。なお文章中に登場する「五明領事」が1923年からバンクーバー領事となった五明砂の事と察せられるため、1923年以降にカナダのバンクーバーで書かれたものと推測できる。

本稿ではこの出典不明新聞記事の解明を一つの目標として、まず永澤六郎により執筆された(あるいは執筆されたと推測される)文献を『動物学雑誌』などを総覧して調査した。『動物学雑誌』所収の文献については、日本動物学会(1929)では記事内容を「雑纂」「テクニク」といったカテゴリーに分類されているが、この目録で分類されていない「質疑応答」「新著紹介」「論文抄録」についても整理した。なお「新著紹介」と「論文抄録」は『動物学雑誌総目録』では紹介された書籍や論文の著者名で記されているが(日本動物学会, 1929)、これらの項目における永澤の関与も含めて業績を評価するために、記事の末尾にかっこ書きで示されている紹介者の著作物として扱った。『動物学雑誌』に関する文献調査は国立国会図書館のデジタルアーカイブに収録されている『動物学雑誌』によったが、一部欠号や欠頁が存在するため、国立科学博物館図書室所蔵の原本も閲覧して補足した。

以上の文献調査により、永澤がペンネームを使用して記した記事も散見されることが判明した。そこでそれらのペンネームについても国立国会図書館内のデータベースや検索エンジンを使用して調査した。また、当時のバンクーバーへは日本人移民が多数入植し、日本人コミュニティがあったことが知られている(田村, 2002)。上記「出典不明新聞記事」もそこで執筆されたかと疑われたことから、バンクーバーにおける日本語新聞について解説した諸文献を調査することによって、永澤の人物像に迫るよう試みた。さらに得られた情報から、バンクーバーの日本語新聞『大陸日報』が収録されたマイクロフィルムを国立国会図書館で閲覧し、当該不明記事を搜索するとともに、永澤に関連する情報を収集した。

永澤六郎の姓は「永沢」と新字体で記されているものもある。晩年本人も「永沢」を使用してい

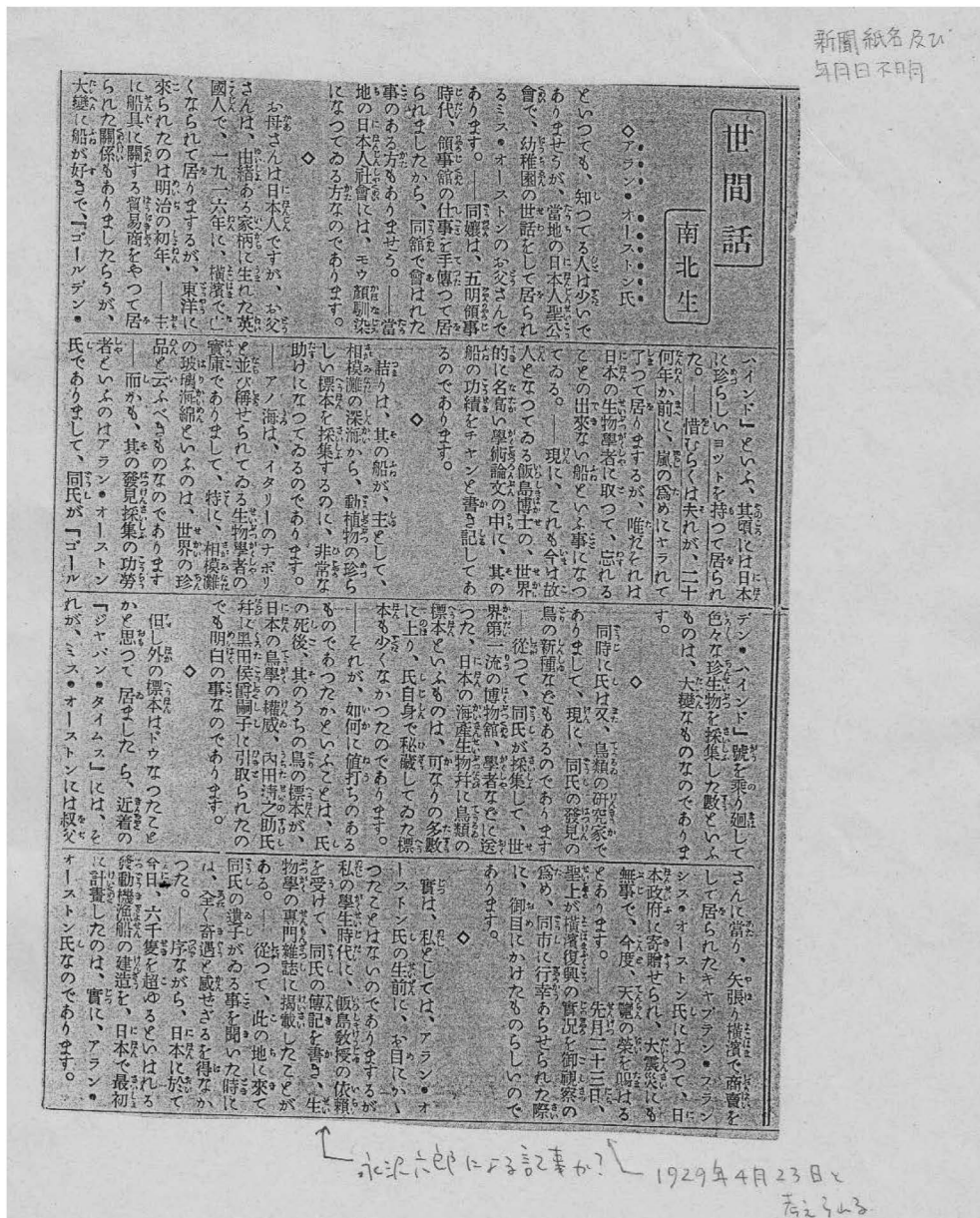


図1. オーストンについて書かれた不明新聞記事。「南北生」の署名がある。本研究によりカナダ在住の日本語新聞『大陸日報』の1929年5月4日付け一面コラムであることが判明した。

るが、大半が「永澤」とされていることから、引用部を除き旧字体の「澤」で統一した。

結果と考察

永澤六郎とはどのような人か？

最初に永澤六郎について、動物学の文献におい

て知られるところをまとめる。永澤の人物像について記された記録は、川田 (2016) でも一部引用されている通り、現在のところ大島 (1967) が最も詳しい。「学究には向かぬ鬼才」という見出しで始まるこの文章では、シロアリなどの昆虫類から海生無脊椎動物まで広く研究したことで著名な動物学者、朴澤三二の同級生 (本文中では「同じクラス」)

として、永澤六郎について記録に留めている。その来歴及び性格について「たしか宮城県古川町の人で、二高卒業、温厚着実な朴沢君に対して、これは才気煥発、目から鼻に抜けるような鋭い男であった」としている。永澤はアワビの生態・発生の研究を卒業論文の題として与えられたというが、彼自身が得た研究成果について発表することはなく学生時代を終えたという。「落ちついてコツコツと顕微鏡を窺くような仕事は彼に向かなかったらしい」と永澤の研究姿勢を評価している。

一方で彼の『動物学雑誌』に対する関わりとして、それまで魚類学者の田中茂穂が編集を行っていたのに代わって、永澤と大島が編集を担当することになったとしている。大島自身は「大して気乗りしなかった」と述懐しているが、乗り気の永澤に押されて二人で担当することになったようだ。その結果、写真の口絵を付けたり、講話欄を設けるなどしてページ数が増加した。ところがそのせいもあってか、永澤自身の研究は進まなかった。大島は旧制五高（現熊本大学）に赴任することとなったため、その後は一人で編集を担当していたとのことである。大島（1967）による永澤の記述は以下の不可解な文章で閉じられている。

「ところが、あるとき突然彼の姿が教室から消え去り、雑誌は発行されずに幾月かが空しく経過して、皆が大迷惑をした。彼の消息は杳として知れなかったが、程経て平坂恭介君が、留学の途次アメリカに着いた折、シアトルで永沢君に遭ったそうである。彼の地で新聞を出していたということであった。」

「平坂恭介」は永澤や朴澤の1学年後輩で動物学教室に在籍した人で本間（2002）に詳しいが、このシアトルでの対面については後述する。

大島（1967）の記述に登場する朴澤と平坂もまた永澤について文献中に書き記している。1940年9月発行の『動物学雑誌』は長年東京大学附属三崎臨海実験所の採集人だった青木熊吉の喜寿を祝う特集号として発行された。この号で朴澤（1940）は「同級生は何れも揃って元気のいい人々であった為か、何かと青木（著者注：青木熊吉）氏と折衝する事も多かった」と述べている。また平坂（1940）は「熊さんに至っては、（中略）實に眼光爛々、人の肺腑を抉る様な辛辣極る批評を時々や

る。尤もそれは當時、遠藤吉三郎、木下熊雄、永澤六郎等と云ふその道の猛者が多かったから大して目立ちもしなかった」と永澤を引き合いに出している。大島（1967）の「才気煥発、目から鼻に抜けるような鋭い男」という評価と合わせると、同世代の先輩・後輩も認める切れ者といった人物像が想像できる。

一方で『動物学雑誌』には、永澤の別の一面をうかがい知ることができる記述もある。1910年5月発行の同誌には、「春の三崎」として1910年3月26日から4月8日の間、三崎臨海実験所に来場した人々の逸話が紹介されている（て、1910）。この間17名の来場があり、永澤は12番目の来場者だったらしい。「永澤、浅野の二氏は各其好む所の研究に従事し」との記述があるので、おそらく永澤は卒業に向けて研究を推進していたことと思われる。課外活動の記録として「晴天は僅か二三日に過ぎざりしかと新に購入したる遊戲道具、臨海倶楽部書籍の増加したるもの四十八冊あるあり殊に永澤氏到着以来は大いに賑しく笑聲寄宿舎に響いて愉快なる春期休暇を送れり。（て）」と記されており、永澤が到着した後には大いににぎわったのだというから、彼は研究室のムードメーカー的な役割を持っていたことが推測できる。この記事執筆した署名の「て」は恐らく早めに入場した（到着準の氏名として3番目に名がある）寺尾新と考えられる。

なお、ここに登場する「臨海倶楽部」とは永澤（1911a）でも紹介されている通り、1909年9月20日に田中茂穂と木下熊雄が発起人となって設立された三崎臨海実験所の課外活動団体のようである。当時実験所にこもって研究していた学生たちの憩う様子が想像できてほほえましい。

永澤六郎の東京大学における経歴

永澤は1907年9月に東京大学動植物学科に入学した。東京帝国大学（1907）によると、「第一学年」として「永澤六郎 宮城 平」の記述があり、宮城県の平民の出ということと思われる。この年の同級生には大島（1967）が指摘した朴澤三二の他に石川光春・大迫元雄・大地原誠玄・河村美熊・松島種美・松島龍蔵・児玉親輔・江原眞伍・青木文一郎・浅野彦太郎・鈴木靖があった。これら同年入学12名のうち、生年が判明した7名は1883年（青木）から1885年（朴澤・大迫）の生まれとなっており、出身地に関する大島（1967）の記憶が正し

ければ、永澤もおよそこの間に宮城県古川町（現大崎市古川）で生まれたと考えられる。なお、後述する日系カナダ人関連文献では、永澤の生誕地を「京都府」としているが、これは間違いであろう。

翌年の東京帝国大学(1908)でも「第二学年」として記述は同様。東京帝国大学(1909)になると「東京帝國大學動物學科」として記録されており、3年から動物学科所属となったことがわかる。同級生には青木文一郎・朴澤三二・大地原誠玄・浅野彦太郎の四名がある。1910年9月に永澤は東京帝国大学大学院理科へ進学したようだ。東京帝国大学(1910)では「軟體動物 理 永澤 六郎 宮城平」との記述があり、大島(1967)が記録にとどめている通り、アワビ等軟體動物学を専門としていたようだ。なお、青木、朴澤も同時に大学院へ進学している。翌年東京帝国大学(1911)及び更に東京帝国大学(1912)の同大学一覧においても同じ記述があるので、大学院3年次まで在学していたようだが、東京帝国大学(1913)において、永澤の名を見つけることはできなかった。大学院を卒業したのか、あるいは退学したのかは不明だが、自身の研究成果が論文として雑誌に発表されたような形跡はないので、少なくとも理学博士を授与されたということはなからう。

一方、無署名(1907)によれば1907年10月15日発行の『動物学雑誌』において永澤や青木が東京動物学会に入会したことが記録され、翌年8月号では「動物学科二年生」として此度進まれし諸氏は次の如し(空字ママ)として永澤の名がある(無署名, 1908)。1910年7月に動物学科を卒業したことも無署名(1910a)として記録されている。同誌への初掲載となる永澤(1910a)は、軟體動物前鰓類の腎臓に関するレビューで、彼自身の研究成果を発信した原著論文ではない。また同年の永澤(1910b)は丘浅次郎による雑誌記事に対する評論を抄録したものである。これら最初期の記事はこの後彼が雑誌編集者として書籍や論文の紹介及び評論を多数執筆するようになる端緒ととらえることもできよう。

この年の12月、永澤は大島廣とともに「動物学雑誌編輯委員」として、東京動物学会の役職を得ており(無署名, 1910b)、上記大島(1967)の記述と一致する。これを機として1911年以降、永澤が『動物学雑誌』誌上に掲載した文章が非常に多くなっているのが注目すべき点である。それらは日

本動物学会(1929)でも検索可能だが、無署名のものなど編集者の立場として執筆されたものも多数あるため、これらを総覧して付表1にまとめた。なお1914年の記事が少ないのは、1913年12月に行われた動物学会評議員会において雑誌編輯委員が吉田貞雄になったためである(無署名, 1914a)。そして吉田は任期半ばで大阪高等医学校に赴任したため、4月15日から後任として山田信一郎が就任したとの記事が会記に見られる(無署名, 1914b)。この時期、後述する通り永澤はペンネームでの執筆活動を開始することとなるのだが、1915年には再び雑誌編輯委員となり(無署名, 1915a)、「永澤」名義でも多くの記事を執筆するようになる。よって永澤が『動物学雑誌』の編集に携わったのは1911–1913年及び1915以降、後述するように1917年の3月号あたりまでということになる。

動物情報の普及に努めた永澤

『動物学雑誌』に掲載された記事を総覧すると、永澤が取り扱った題材の多様さに驚かされる。記事内容をカテゴリー分けして整理すると、最も多いのは国内外で執筆された学術論文の内容を紹介した「論文抄録」(133件)、次いで「新著紹介」(59件)、「伝記」(23件)「質疑応答」(19件)となった。動物関連の記事は日本動物学会(1929)では分類群ごとに分けてあるが、すべてまとめると27件を数え、そのうち16件が哺乳類に関する記事だった。

「論文抄録」と「新著紹介」は全体の大半を占め、特に1915年と1916年において非常に多くなっている。雑誌の編輯委員ではなかった1914年にこれらの記事がないことは、編輯委員の仕事としてこれらをまとめていたことがうかがえる。それにしてもその量は義務的な雑誌業務とは言えないほど充実しており、号ごとに比較しても最大9件の論文抄録を掲載した月号もある。またその内容も哺乳類・鳥類・昆虫類・軟體動物・棘皮動物と多岐の分類群にわたる論文に関するものまで分野横断的である。取り扱った論文には記載論文から新種の学名を羅列引用しただけの数行のものもあれば、永澤本人の感想を含めた現在という「書評」に相当するような長文までであるので、単に業務として雑誌にまとめることだけを目的としたわけではなく、自身の興味・関心を啓蒙普及する目的で取り組んでいたようにも見受けられる。

質疑応答欄においても永澤の能力は大いに発揮されている。例えば「ラシドリに充つべき漢字は」という「某」氏からの質問に対しては、『和名抄』『東雅』『多識篇』といった古典の辞書を引き合いに出して約2ページにわたって解説し、難解な漢字の使用について「京都の醫學の先生の如く、人の見も聞きもせぬ様なる漢字を捻出し來り、數千の下等動物に、一々漢字を當籍むるが如きは、吾輩至極不賛成なり」と批判的な意見まで表明している（某・永澤，1915）。後述するが、質疑応答欄には永澤が彼自身のものと判断できるペンネームで記した質問に対して署名入りで自答しているものもあるので、もしかしたら雑誌の内容を充実・活性化させるために、あえて「雑録」的な記事に仕上げるのではなく自作自演とも取れる質疑応答として掲載したのではないかと疑いたくなるものも含まれている。

大島（1967）によると、永澤はアワビの生態・発生が研究テーマだった。そのため貝類を含む軟体動物あるいは広く海産動物に関する記事が多い。ところが1912年以降になると、哺乳類・鳥類・爬虫類といった脊椎動物についても多くの紹介記事を書くようになっていく。1912年9月以降、永澤は東京大学動物学教室には籍がなかったはずだが（東京帝国大学，1913）、『動物学雑誌』の編集にはますます力が入ったように見受けられる。脊椎動物に関する記事は、海外の動物園で飼育されている、国内未着の動物に関する内容が多く、ほとんどは海外で紹介された雑誌記事や論文の抄録という形で発表された。「研究には向かなかった」とはいえ、相当数の海外文献を読み漁り、知識を蓄えていたことが推測できる。

永澤がどのような雑誌記事から情報を得ていたかをうかがい知ることができるのが永澤（1912）である。これは動物収集家ハンス・ションブルグ（Hans Schomburgk）がコビトカバに餌を与えている写真付きの記事で、この写真の原典はニューヨーク動物学会（「紐育動物学会」）の『Zoological Society Bulletin』1912年7月号の巻頭口絵（Frontispiece）に発見できた。同号にはHornaday（1912）とSchomburgk（1912）のコビトカバに関する解説文が掲載されており、これらの記事内容をまとめて永澤自身のコメントを加えた抄訳であると考えて良からう。当時の郵便事情から考えると、この雑誌が東京大学に届いたのがおそらく8月末頃のはずで、これが11月15日発行の『動物学雑誌』に掲載

されたという事実が永澤の迅速な執筆・編集作業をうかがわせる。また永澤が書いた記事には「オカピ角を有するか」というものもある（永澤，1915b）。大正時代にすでにオカピやコビトカバといった「珍獣」の記事が日本の雑誌に紹介されているということにも驚かされるが、これらはいずれも外国で紹介された論文や雑誌記事からの抜粋で、欧米の動物知識を日本にも広めようとした彼の啓蒙普及の意欲が感じられるのである。

ところで同様に日本ではまだほとんど知られていない動物について積極的に啓蒙した昭和の人に高島春雄がある。自身の研究は昆虫やクモ・サソリといった無脊椎動物だが博覧強記として知られ、動物に関することのみならず、生物学全般また科学史にも精通した「よろずや」で、一般書の著作も多い。コビトカバ・オカピに加えてジャイアントパンダを含む3種を「世界三大珍獣」と名付けたことでも有名である。また高島は日本哺乳類学会の前身「日本哺乳動物学会」や「日本動物分類学会」「日本鳥学会」といった多くの学会で庶務幹事などの要職、また雑誌の編集に携わった人物として知られる。

高島は自身の動物への興味関心について、影響を受けた人物の一人として一世代前の動物学者である江崎悌三の名を挙げている（高島，1958）。その江崎は永澤をして「歴代編集委員の中でも同誌の黄金時代を出現せしめた最も定評ある名編集者」と評している（江崎，1933）。江崎は1920年に東京大学動物学科に入学したので、永澤とは学年が10年以上離れている。また後述するように永澤は1917年以降動物学分野から忽然と姿を消しているため、両者が対面することはなかったと考えられる。すなわち江崎は『動物学雑誌』に残された記述によってのみ、永澤を正當に評価した人と言える。これらの3名に共通していえるのは、動物そのものに対してのみならず、研究史や海外事情にも精通した博識を有し、執筆・編集・出版の力でそれらを普及していたことで、永澤の『動物学雑誌』での啓蒙スタイルは連綿と受け継がれていったように見ることもできると考えるが、いかがだろうか。

なお、『動物学雑誌』以外の同時代文献において永澤が記したものを探索してみたが、発見できたものは『教育画報』の第3巻第6号（永澤，1917a）と第4巻第7号（永澤，1917b）においてそれぞれ「鯨の種類」と「海産貝類のいろいろ」という各5

ページの記事が見いだされたのみであった。いずれも1917年の執筆で、後述する永澤が『動物学雑誌』を去る間際のことである。鯨類と貝類は永澤にとって最も力を入れた分類群だったと思われるが(付表1参照)、どのような経緯でこれらを執筆することとなったのかは未解明である。

雑誌スタイルの刷新

1910年まで『動物学雑誌』の編集は田中茂穂が中心となっていたが、1911年に大島廣と永澤六郎が編集に携わることになり、大島(1967)が回想している通り、それまでの雑誌形態とは異なり、巻頭に口絵写真と解説を入れて、その解説文を掲載する等、雑誌スタイルの刷新が行われた。ただし、巻頭に口絵付きの伝記を入れるスタイルは、1908年の『動物学雑誌』を見ると渡瀬庄三郎による「博物学大家列伝」という連載があるので実際には初めての試みではない。口絵を挿入するというアイデアはその後の執筆状況からみても永澤によるもので、おそらく「博物学大家列伝」に影響を受けてのものではなかろうか。

『動物学雑誌』1911年1月号の「帝国大学理科大学新校舎」と2月号の「三崎臨海実験所」では写真に短い解説文が付され、3月号ではこのころ逝

去した動物学教室2代目教授のチャールズ・ホイットマン(Charles Otis Whitman)の肖像写真及び略年譜が記されている。これら口絵解説の開始当初は無署名で書かれたものとなっているが、日本動物学会(1929)では著者が「永澤六郎」とされている(図2a)。これは同年12月号に付録として添付された日本動物学会(1911)において「永澤」の執筆者がカッコ書きされているためだろう(図2b)。このように1910年までの『動物学雑誌』では文責署名の有無が統一されていない点の特徴であるが、1911年以降はほぼすべての記事に署名が付されるようになっていく。1911年1~3月号の口絵解説はその移行期に当たる文献と思われる。編集当時は無署名で執筆されたが、年末に目録を作成するにあたり文責を明確にする方針が定着したために署名を加えたと考えられる。続く三号(4月号~6月号)では「大島廣」の署名が示される文章が掲載され、更に続く7月号においては「ナポリ臨海実験所」と「モナコ海洋博物館」の写真ページがあり、解説文が付されているが、署名がない。しかし文章中に「講話欄参照」とあり、同号には口絵解説に関連した「講話」として永澤六郎名義の「欧州の生物學實驗所(一)」が掲載されていることから、同じく永澤による仕事である。この講

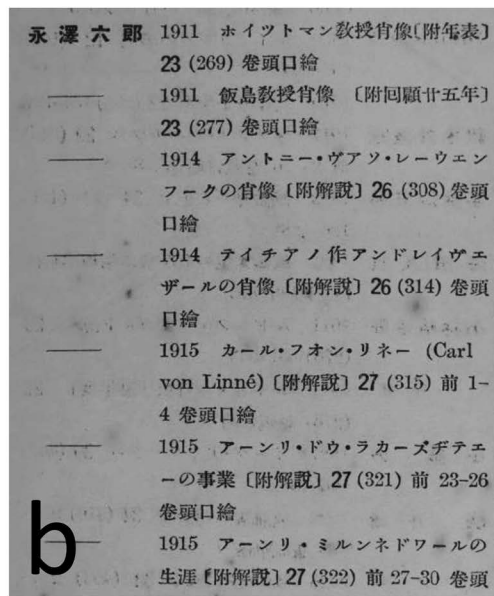
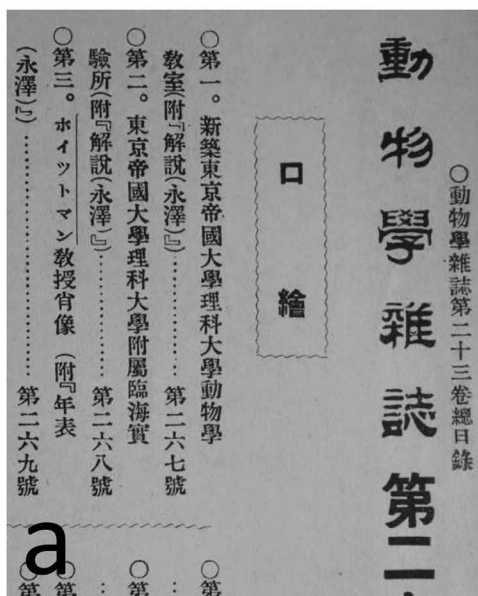


図2. 『動物学雑誌』269号に掲載された巻頭口絵「ホイットマン教授肖像〔附年表〕」には署名がないが、『動物学雑誌第二十三巻総目録』では「(永澤)」(a), 『動物学雑誌総目録, 第壹巻-第四拾巻』では「永澤六郎」の執筆と明記されている(b)。

話はこの年の三号に分割して掲載されたもので、総ページ数は52ページという大著となっている(永澤, 1911b)。この時代に世界の大学等研究機関が所有する生物研究施設をまとめた立派な総説といえるものである。永澤は参考文献としてC. A. Cofordの著書を五島清太郎から借りて読んだのだという。その和文抄録とはいえ、彼の翻訳力に驚かされるものである。

また『動物学雑誌』には「抄録」の項目が追加され、国内外で発表された論文の内容が日本語で紹介されるようになった。それまでは論文や新刊の紹介に加えて、生物学界隈におけるトピックを研究分野ごとにまとめた報告(内外彙報)や学会・集会の報告(学会記録)などを含めて「雑録」として掲載していたが、動物学における最新の研究成果を日本の研究者に紹介するべく紙面を拡充したようにも見て取れる。これらの新しい文献を紹介する際、書誌情報を明記して検索が容易になる様に統一された点も現代風といえよう。これら「口絵・講話・論説・抄録・雑録(新著紹介・内外彙報・学会記録)」という基本的な雑誌スタイルは、後述する1917年の永澤編集委員更迭の後も同誌が横書き態に変更される移行期の1923年ころまで踏襲されている。『動物学雑誌』の編集初年には大島廣との共同作業もあったが、大島(1967)は編集作業に「大して気乗りしなかった」と述懐しているので、永澤は近代的な『動物学雑誌』のスタイルを構築した人と見ることも出来よう。江崎(1933)の「名編集者」の評もうなずけるものがある。

『動物学雑誌』29巻339号の学会記事によれば、1916年12月に行われた東京動物学会役員の改選において、永澤は「『雑誌』編輯委員」として留任となっているが(無署名, 1917)、1917年1月号となる339号では10件、340号では5件、そして341号では2件のみと執筆記事の数が減少していくのが見て取れる。1917年4月15日発行の342号では永澤の記事が全く見られず、全体のボリュームも少なめ(28ページ)である。さらに次号となる1917年5月発行の343号には谷津直秀署名により雑誌の発行がこの年3月以降編集委員の「病痾」のため大いに遅れたことを詫げる記事が掲載されている(谷津, 1917)。永澤はこのころ病気になる編集作業に遅れを出してしまったことになっている。ところが大島(1967)は「あるとき突然彼の姿が教室から見え去り、雑誌は発行されずに幾月か

が空しく経過して、皆が大迷惑をした」との不可解な記述を残している。仮に病気で編集作業が遅れたのだとしたら、「大迷惑をした」という不名誉な記述を1学年先輩の大島がするとは思えない。現在のところ、この矛盾を説明できる情報はないが、いずれにせよ谷津(1917)が掲載された343号と次号344号にそれぞれ口絵解説となる伝記「分類学者ジョン・レー」及び「アンリ・ドゥ・ブレンヴィル」を掲載した後は「永澤六郎」名義の記事は見つけられず、その消息は途絶えていた。

カナダの日本語新聞における永澤の再発見

前述大島(1967)の永澤に関する記述では「平坂恭介君が、留学の途次アメリカに着いた折、シアトルで永澤君に遭ったそうである。彼の地で新聞を出していたということであった」とある。平坂恭介は1911年に東京帝国大学動物学科を卒業しているので、永澤の1学年後輩である。農商務省水産局や御木本真珠養殖場の技師を経て台湾帝国大学農学部動物学講座初代教授となった人物である(本間, 2002)。なお、本川・于(2015)では学部は「理農学部」とされており、同時に同大学動物学教室教授となった人物には東京大学で永澤と同級の青木文一郎がある。平坂と青木はそれぞれ「動物学第一講座」と「動物学第二講座」を担当した。海棲哺乳類学における平坂の経歴や業績は本間(2002)に記されている。彼は1928年に1年10か月の英国その他欧米諸国の留学を経験したというので、その折にシアトルで永澤に会ったものと思われる。台湾帝国大学の設立は1928年4月20日の事であり、この年に理農学部動物学講座が設置されているので、そのころの出来事である。

大島(1967)の記述に間違いがなかったことは、当時の北米での日系人コミュニティを研究した田村紀雄氏の著作から確認することができた。田村(2003)によると、永澤はカナダのバンクーバーで日本人コミュニティ向けに発行されていた日本語新聞『大陸日報』の編集にかかわっており、その後別の日本語新聞『日刊民衆』でも編輯主任として従事した。開戦直前の1941年2月末日退社し、3月の日本郵船氷川丸で帰国の途につき、1961年日本で没したという。また、田村(2014)では永澤の経歴と風貌について「京大出身という以外詳らかでない点もあるが、伝えられる印象は長身、背筋をピンとして歩き古武士の風貌だ」ったという。「南北老人」のペンネームでよく執筆して

いたようで、「漢籍に精通し、記事も労働者には逆に読みづらかったのではないか」との評もある。帰国以降の永澤について「一年ほど東京で暮らした後、出身地の京都に帰り、大谷高女の教員になる。しかしすでに高齢だったため間もなく、辞職してここで知り合った婦美子と結婚、兵庫県柏原町で余生をおくった。」と記されている。

著者の田村氏からは佐藤・佐藤(1969)の78ページで紹介されている「ビーシー州日本語学校第1回教育懇談会(1923年10月)」の集合写真に永澤が写っているとの私信もいただいた。これが現在のところ永澤の姿を知ることができる唯一の写真である。

一方で、「京大出身」また「出身地の京都」との記述については永澤と「永沢六郎」が同姓同名の別人である可能性を示唆している。しかしながら『「南北老人」のペンネームでよく執筆した』という記述は、本研究で解明することを目的とした出典不明新聞記事の署名「南北生」とよく一致する。この記事の文脈から考えて、執筆したのはアラ

ン・オーストンの伝記を執筆した永澤六郎で間違いないので(川田, 2016)、偶然の一致とは考えにくい。田村(2003, 2014)の記述が誤りと考えられる。

永澤なる人物が関わった日本語新聞のうち、国内所蔵があるものは国立国会図書館所蔵『大陸日報』のマイクロフィルムのみである。そこで閲覧してみたところ、1924年から『大陸日報』紙面に「世間話」と銘打った一面コラムを「南北生」名義で、ほぼ連日掲載したことがわかった。1925年1月1日の1面では「奇遇」のサブタイトルで「世間話」を執筆しているが、これはオーストンの娘「ミス・オーストン」に関する記事で、かなり詳しくオーストンのことが書かれている(南北生, 1925)。東京大学動物学教室教授の飯島魁が「カナダ某大臣」あてに書いたオーストンの推薦状のようなものの全文、永澤がシアトルで飯島魁の長男飯島俊太郎(「ミス・オーストンの幼馴染」だったとのこと)に会ったことなど、これまでに知られていなかったオーストンにまつわる情報も散見し

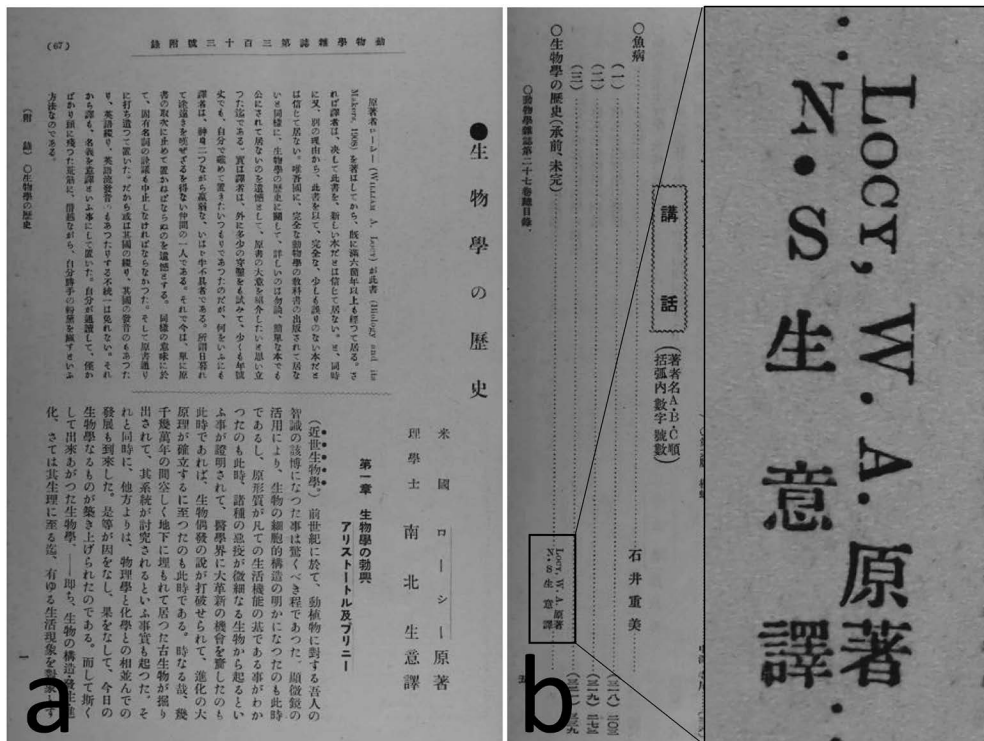


図3. 『動物学雑誌』313号の付録として掲載された、「生物學の歴史」(a)、「南北生意譯」とあるが、同年の『動物学雑誌二十七巻總目録』では「N.S.生意譯」とされている。すなわちこれら2つのペンネームは同一人物のものと考えられる。

た。そしてさらに閲覧を進めると1929年5月4日の『大陸日報』の一面コラム「世間話」が件の出典不明新聞記事であることが判明した(南北生, 1929)。なお1929年5月13日からは連載コラム「今日の問題」を『大陸日報』で開始している。これは「世間話」と同様にいくつかの話題をオムニバス形式で紹介したものである。これら新聞記事については現在までにすべてを閲覧できておらず、今後調査を進めて、永澤がどのようなトピックに興味関心があったのかを分析したいと考えている。

永澤六郎のペンネームについて

以上の通り、本稿において永澤六郎について調査を行うきっかけとなった出典不明新聞記事は、彼が『動物学雑誌』の編集から離れたのちにカナダへ移住し、彼自身が編集に携わったバンクーバーの日本語新聞に掲載された一面コラム記事であることが判明した。永澤六郎が「南北生」のペンネームを使用して執筆活動を行ったことは確認できたが、以下ではこのペンネームについて少々詳しく解説したい。

1. 「南北生」と「N.S.生」

永澤が使用していた「南北生」や「南北老人」といったペンネームは、彼が『動物学雑誌』の編集を担当していた時代から引き継がれたものであると考えられる。『動物学雑誌』上で「南北生」名義の記事が掲載されたのは1914年の313号に付録として収録された「生物学の歴史」である(図4a)。これはLocy (1915)の「意識」とのことで、この後永澤が『動物学雑誌』で記事を掲載した最後の号となる1917年の346号まで7回にわたって連載されたものである(南北生, 1914-1917)。その終わり方も「第十章 発生学の起源」についてのさわりを述べた程度で締めくくられており、中途終了と考えてよいと思われる。また、『動物学雑誌』316号の会記末尾に「生物学の歴史 記事輻輳の為今月来月休載」(無署名, 1915b; なお「輻輳」とは記事が方々から集まっていること)とあることから、原稿が十分に集まらなかった際の「穴埋め記事」として、まとめて執筆しておいたものを随時掲載していったのであらうと考えられる。

日本動物学会(1915)によると、興味深いことに、315号に掲載された第3回以降、執筆者の表記が各号の目次とは異なっており、「Locy, W. A. 原

著N.S.生意譚」となっている(図4b)(第2回以降は著者名が記されていないが、各号の目次では「南北生意譚」)。このように、永澤は1914年に雑誌編集を担当していなかったためか、「南北生」以外にも「N.S.生」というペンネームも併用して執筆活動を開始していたようだ。表1はこれらのペンネームで執筆された『動物学雑誌』の記事一覧である。これを見ると1914年以前は質疑応答欄への投稿用として「N.S.生」の名を使用していたことがうかがえる。また1914年以降は「生物学の歴史」のほかにもこれらのペンネームを用いて書かれたものとして「話の種」と称する連載シリーズがある。307号(1914年5月号)に「N.S.生」名義で「話の種其の一」(N.S.生, 1914a)として開始され、以後1915年12月号となる326号まで15回にわたってほぼ毎月連載された(表1)。生物学上の様々な話題をオムニバス形式でまとめたものだが、中には第14回の「東京自然博物館設立の意見」(N.S.生, 1914b)とサブタイトルが与えられた回のように特定の話題で書かれた総説的なものや論説もある。なお「東京自然博物館設立の意見」はこの時代にして日本に自然史博物館が存在しないことを憂い、設立を求むという姿勢で書かれたもので一読の価値がある。この記事のように、日本動物学会(1929)や、インターネット検索ではサブタイトルや記事見出しまでは収録されていないために埋もれてしまっている情報が多々あると考えられるので、表1の「備考」として各「話の種」の内容も総覧できるようにしたので参考にされたい。

「話の種」は1915年をもって終了となるが、翌年の330号から332号まで3回にわたって、「續『話の種』」が「南北生」名義で、さらに339号から346号では同じく「南北生」名義の「新續『話の種』」が連載されている(表2)。このように「N.S.生」として開始された連載が「南北生」に引き継がれていることから、これらのペンネームは同一人物で、その正体が当時『動物学雑誌』の編集にあっていた永澤六郎であることに疑いはなさそうである。

2. イニシャル「R」

「話の種」シリーズが開始される以前、1912年と1913年の『動物学雑誌』では「B・E・R・S・T」名義の「随聞随録」と「A・E・R・S・T」名義の「雑聞雑話」というコラムがそれぞれ連載さ

表1 「N.S.生」及び「南北生」名義で『動物学雑誌』に掲載された永澤の執筆記事一覧.

著者	年	タイトル	号	ページ	内容
N.S.生	1912	人名を動物学名に転用する時の語尾のiは一つか二つか	284	375	質疑応答. N.S.生の質問に寺尾解答
N.S.生	1913	問一 科名には模式属名を附すべしという萬國命名規約は和名にも適用せざるべからざるものなりか	293	190	「質疑応答」にてNS生名義での質問. 回答は松本彦七郎
N.S.生	1913	動物の幼蟲に學名を附するも差支なきものなりや	295	303	質疑応答. N.S.生名義の質問に木下解答
N.S.生	1914	話の種 (其一)	307	283-284	イルカの飼養, 鴨と蚊と, 眼の中に蠅の仔, 北極熊の運命
N.S.生	1914	話の種 (二)	313	525-529	炭疽菌への紫外線照射実験, カリフォルニアの油田に住む水鳥と兎, 独逸と佛国の人口増加率, 各国の出産率の低下, 馬の出産頭数, 移入種の鯉, 軍用犬, 雲母の砂, アンボンタン, 棘皮動物天国, ナマコの細胞に対する酸の侵入実験, 舌相學, 紀元前四世紀インドの動物園, 賢い犬ロルフ
南北生 (意譯)	1914	生物學の歴史	313	付録 67-78	William A. Lacyの著作の意訳
N.S.生	1914	話の種 (三)	314	566-571	河童, 軍用伝書鳩, 伝書鳩の速力, 佛国人口, アリクイの胎児に齒の痕跡なし, 日本での人体解剖, 西洋医術の導入, 試し斬りの検体, 顕微鏡の伝来, 日本と欧米の月別出生数
N.S.生	1914	『種の起源』の翻譯書	314	571-572	これまでこの訳書は高くて普及されてなかった. もうすぐ新潮文庫で手に入りやすいものが出版される, という案内
南北生 (意譯)	1914	生物學の歴史 (續)	314	付録 89-104	巻末付録
N.S.生	1915	話の種 (四)	315	39-42	紐育の水族館のイルカ, 開戦前独逸の家畜, 動物の吐き出す炭酸ガス量, 海綿の代用品, 子羊の皮, 戦争と伝書鳩, 牛乳の脂肪量, 色盲の遺伝, アダムイヴ, プレパラートに印をつける方, バブアの人食, ダーウィンの長男, 米国野牛の数, 卯年にちなんだウサギに関する故事いくつか
南北生 (N.S.生) (意譯)	1915	生物學の歴史 (續)	315	後1- 後12	巻末付録
N.S.生	1915	話の種 (五)	316	101-104	白耳義陷落前の動物園, ハーゲンベックの息子, 人類胎児の身長, 埃及の飼養動物数, プレパラート封入剤, 野生のGallus, 比律賓の飛ぶ甲殻類, 英国の蚊の産卵数, 白耳義ルーヴェン大学, 欧州の人類起源, 生糸の競争者, 軍用伝書鳩, 「デキダリス」葉の効用, 密閉容器内の原虫, 新嘉坡の語源, 虎人を襲わず, 紐育動物園, 西洋の羽飾りと鳥の絶滅, 極楽鳥の救済, 露西亞の禁猟区計画, 英国臨海実験所, 機械水雷によるナガスクジラの死, キーウィの卵
N.S.生	1915	話の種 (六)	317	166-172	天竺鼠の腸内細菌, 羽軸の管, ロブスターの脱皮, アフリカの寄生ミミズ, 哺乳類の毛の由来, Shrewの臭腺, 穿山甲の飼育, 脊椎動物の赤血球, 化石中のバクテリア, 魚で家畜を養う, 倫敦動物学会名誉会員の推薦, 独逸学問の批評, Guntherの図書, Scottの南極採集品, 倫敦動物園飼養数, 動物園のゴリラ, ボストンの動物園計画, 印度の白鷺,
N.S.生	1915	遺傳に關する日本文の良書を 知りたし	317	172	質疑応答. 無名氏の質問にN.S.生解答
N.S.生	1915	話の種 (七)	318	224-229	春日の神鹿の続き特に白鹿について, 支那の神獸特に河童について, カジカと鯨の起源, 朝鮮牛, 管水母, 日本土官博物学を学ぶべし, ミシシッピ氾濫後留置された魚類の顛末及び新湖での繁殖計画, 米国で大量の毛虫が汽車を停める, コンゴで矮小人種発見, 豪州産Pipe fish, ラマールの動物哲学, ロブスターの輸入・其の子供に癒着双子多し, 人体の薬効についての迷信, 兎の足はTalisman
N.S.生	1915	話の種 (八)	319	295-297	八田三郎講演, 原生動物不死の金言, 世界動物園数, 兎の毛色の遺伝, 甲殻類の肢の再生, プリビロフの臘腸齋生息数, 灯台に止まり木設置, 魚類消化管内寄生虫, 世界最大の蜘蛛の巣, 紐育の金魚虐待防止, 生類憐と金魚, タツノオトシゴの効能

表1 続き

著者	年	タイトル	号	ページ	内容
N.S.生	1915	話の種 (九)	320	359-361	海水中の遊離炭酸, 去勢雌雄に似る例, 蘇虫の利用, 精神病の診断, 倫敦動物園の収入, 船食虫防薬, 鼠死体内でのペスト生存日数, 横濱のネズミ駆除に配布した殺鼠剤, 恙虫病, 再帰熱と虱, 駝鳥の養殖, レンズ用紙は吉野紙, 線虫の数, 線虫の生息環境, 線虫水道中にもあり, 水道水中に子虫もあり
N.S.生	1915	話の種 (十)	321	415-417	独逸の暗算軍用馬, 雉は遠くの砲撃の音を聞く, 殺虫剤による虫の減少による鳥の減少, 毒蛇の毒にバナナ汁, 微菌の化石, 救助軍用犬の数, クイーンズランドの奇麗な鸚鵡3種の絶滅, ダーウィンの孫戦死, 倫敦動物園餌代高騰により収入減, 天然記念物保護のための公園設置,
N.S.生	1915	話の種 (十一)	322	468-469	飼鳥野外でも大丈夫, 動物標本の天敵カツオブシムシ, ディーンの種類関係目録, 再び雉砲撃を予知する, 雉天災も予知する, 佛国では鸚鵡予知に使える, 紐育動物園の象と獅子殺処分さる, 紐育動物園の乱暴なアフリカゾウ, 漳州から輸出された野兎の皮数
N.S.生	1915	話の種 (十二)	323	510-515	江戸博覧会出品の人形から江戸時代の鶴保護および綱吉と光圀などの歴史的考証数件さらに生類憐みの令まで特集
南北生 (N.S.生) (意譯)	1915	生物學の歴史 (續)	323	後47- 後52	巻末付録
N.S.生	1915	話の種 (十三)	324	561-563	馬來名物極楽鳥保護, 米国での鳥羽輸入禁止, 米国鳥類分布の激変, テキサスの蝙蝠保護蚊の退治にも効果あり, 巴奈馬の伝染病予防に家畜の管理徹底, 米国の湖アルカリ中毒による鳥の死, 人の潜水深度記録, 独逸で蛋白質人造に成功, 米国牡蠣業者の苦悩, 米国に輸入される飼鳥の数, 米国の羊飼いと毒草
南北生 (N.S.生) (意譯)	1915	生物學の歴史 (續)	324	後59-後 62	巻末付録
N.S.生	1915	話の種 (十四)	325	605-609	東京自然博物館設立の意見
N.S.生	1915	話の種 (十五)	326	646-653	化石人骨発見の歴史
南北生 (N.S.生) (意譯)	1915	生物學の歴史 (續)	326	後63-68	巻末付録
N.S.生	1916	『ガンダ』號虐待事件附上野の兇象の處置	328	88-89	雑録
南北生	1916	續『話の種』(一)	330	158-162	田中茂穂『種及進化の意義』に対する批判について, 東京朝日新聞婦人節操問題について, 科學者の仕事と言論, カタカナ科名推奨, 春日の神鹿殺し石礫詰の刑, 鶴殺し死刑の追加例, 倫敦動物園の飼育動物数
南北生	1916	續『話の種』(二)	331	191-194	人工授精術, マルサスの人口論, 春日の鹿, 狩猟法, リージェントパークの栗鼠, 海を渡る鹿, 亀は手が合わぬ
南北生	1916	續『話の種』(三)	332	243-245	顕微鏡写真, 砒素の害, J. Zool. Res., 貝の紫腺染料, 貝を鳴物(楽器)として使用, サケの卵でキャビア, The Structure of Fowl, オズボーンの洪積紀論, カイガラムシの発生と生態の本, 働蜂が卵殻を脱するまでの發育史
南北生	1917	新續『話の種』(一)	339	23-26	テフザメの食物, イルカの速力, 戦争と紐育水族館の観覧人数と, 芝居をやる犬, 小笠原大蝙蝠の将来, 尾長鶏の起源と種類, 尾長鶏の尾の長さの記録, ヒグマとシグマと
南北生	1917	新續『話の種』(二)	340	54-56	珍味の数々(大谷光瑞からの引用, コウモリ, ガマ, ヘビ等々)
南北生	1917	新續『話の種』(三)	341	100-102	古代狸々の産地, 鱈魚, 進化論の産んだ悲劇
南北生	1917	新續『話の種』(四)	346	252-254	蠅と国家と, ワイル氏病とアブ, 虱除けの薬, 虱人を嗅ぎ分く, 鳥の飛ぶ高さ, 敵味方狼と闘ふ, 野牛と牛の間の子, 紐育動物園の武装, 羽毛の密輸入, 常置教育的観覧施設
南北生 (N.S.生) (意譯)	1917	生物學の歴史 (續)	346	後33- 後36	連載の最終回

表2 永澤が含まれると思われるB・E・R・S・T及びA・E・R・S・T名義の『動物学雑誌』記事一覧。

著者	年	タイトル	号	ページ	内容(タイトル後のアルファベットは署名)
B・E・R・S・T	1912	随聞随録	280	105-110	(一) 佛国に於ける出生及死亡数[R], (二) 極楽鳥の値段[R], (三) タラウスの盗癖[R], (四) 駝鳥の耐寒力[R], (五) 日本畫の馬[R], (六) 活きた水産動物の輸送[R], (七) 一萬円の寄付金を集めた犬[R], (八) 紐育水族館の観覧人[R], (九) 鋸屑の魚類に及ぼす害[R], (十) 文藝と科學との調和[E], (十一) 一八五八年[E], (十二) 左右卵巢説の否定[E], (十三) 赤い雪[E]
B・E・R・S・T	1912	随聞随録	281	183-188	(十四) 「ブルネル」氏腺に於ける一新細胞[R], (十五) 鳥類臍臓の大きさ[B], (十六) 「スピロヘーテ」の系統的関係[B], (十七) 単為生殖で出来た蛙の幼蟲の染色体の数[B], (十八) 牛の合の子仔を生む[B], (十九) 双鞭類の不整齊形の意味[E], (二十) 「カリフォルニア・コンドル」の漸滅[R], (二十一) 兀鷲の食物[R], (二十二) 河豚毒の妙薬[R], (二十三) 白蟻の巢から出入する数[R], (二十四) 阿非利加象の値段[R], (二十五) 鶴, 鴨, 鳧[S], (二十六) 貴重動物の保護[T]
B・E・R・S・T	1912	随聞随録	282	251-253	(二十七) 鸚鵡貝の利用[R], (二十八) 活きた動物の輸送法追補[R], (二十九) 飲酒癖の電気療法[R], (三十) 雪中の孔雀[R], (三十一) ベルムダの蛸捕り[空欄], (三十二) 蛸の産卵[R], (三十三) 長命なるイソギンチャク[B], (三十四) 筋と腱との接続点[E], (三十五) 睡眠の生理[E], (三十六) トロフォスポンギア[E]
B・E・R・S・T	1912	随聞随録	283	306-308	(三十七) 老學者の怡薬[E], (三十八) 顕微鏡で見得る極限[E], (三十九) 鳥賊[E], (四十) 身長 of 最大最小限[T], (四十一) 人體の權衡[T], (四十二) 手の長さ[T]
B・E・R・S・T	1912	随聞随録	284	365-369	(四十三) 「アントン・ドーン」[E], (四十四) 亜米利加野牛の保護[R], (四十五) レントゲン線の人體並に動物體に及す影響[S], (四十六) 鼯鼠欺かる[S], (四十七) 寄生する魚[S], (四十八) 鳥と煙突と[S], (四十九) 鳥賊の移住[S], (五十) 魚類は聴き得るか[S]
B・E・R・S・T	1912	随聞随録	285	421-425	(五十一) 板鰐類の歯の遣りもの人の胎児に発見さる[B], (五十二) 譯語難[E], (五十三) 蒸餾水中の細菌数[E], (五十四) 軀軀の大きさ細胞の大きさ[E], (五十五) 偉人の腦[E], (五十六) 骨の異名[T], (五十七) 「グレート・オーク」[谷津理学博士談]
B・E・R・S・T	1912	随聞随録	286	472-473	(五十八) 蟬を食ふ[S], (五十九) 水母見物世界一周[T], (六十) 亀に乗って山に登つた人[T], (六十一) 保守的なオーウェン[T]
B・E・R・S・T	1912	随聞随録	287	543	(六十二) 鳥體の力學[T]
B・E・R・S・T	1912	随聞随録	288	597-598	(六十三) 頑丈な甲蟲[R]
B・E・R・S・T	1912	随聞随録	289	655	(六十四) 脊椎動物と脊椎動物[E]
B・E・R・S・T	1912	随聞随録	290	725-728	(六十五) 核の固定液[E], (六十六) ヘッケル[E], (六十七) 人類の尾[E], (六十八) 細胞分裂の時間[五島先生], (六十九) 細胞の形[五島先生], (七十) 熱と水と動物[E], (七十一) レントゲン線[S]
A・E・R・S・T	1913	雑聞雑話	292	115-117	(一) ジェームス・スミソンの肖像[R], (二) 觸らぬ神の祟り[R], (三) 犬の餓死に要する時間[T]
A・E・R・S・T	1913	雑聞雑話	293	188-189	(四) アラスカに於ける麝香牛の絶滅[R], (五) 濠州における出産奨励[R], (六) ゼリガニの背に卵を産み付ける昆虫[R], (七) 吻と糞[A]
A・E・R・S・T	1913	雑聞雑話	294	239-241	(八) 「キングコブラ」シャブルと箒きを怖る[R], (九) 発見の悦び[R], (十) 龍涎香母屋をとられる[R], (一一) 大昔埃及を廢した蝗[R], (一二) 西洋古代の生物性紫染料[R], (一三) コブラの知恵[R], (一四) 象の陥穴[R]
A・E・R・S・T	1913	雑聞雑話	295	302-303	(一五) モノアラガヒの自己受精[R], (一六) 龍齒・龍骨[渡瀬理学博士談文責在編輯委員]
A・E・R・S・T	1913	雑聞雑話	296	355-358	(一七) 拘禁せられたる動物の瘦我慢[R], (一八) 軽率な観察[R], (一九) 學術研究船「アントン・ドーン」[R] (二〇) 綴り丈は同じく Grampus [R], (二一) 紅外線と鳥の歸來性[R], (二二) 死體搜索に鶏[R], 白蟻と煙草の煙[T]
A・E・R・S・T	1913	雑聞雑話	298	426-429	(二四) 立法者の所謂先見[R], (二五) 大極楽鳥の運命[R], (二六) 羽毛輸入制限法案[R], (二七) 米国野牛の保護続報[R], (二八) 死體搜索に鶏続報[R], (二九) 春日の石礫詰の刑[R], (三〇) 鶏とスベクトル[R], (三一) 悪性マラリアの潜伏期[R], (三二) 南京虫とテレピン油[R], (三三) 昆虫と癩病と[R], (三四) 睡眠病とカーキ色[R], (三五) 雑誌記者の人物評論[R], (三六) 犬税と狐[T]
A・E・R・S・T	1913	雑聞雑話	299	481-484	(三七) 「古事記」と「聖書」の動物[R], (三八) 日本人は何日で餓死するか[R], (三九) 鰐魚の食物[R], (四〇) 上顎に歯のある抹香鯨[R], (四一) 蝨女兒を殺す[R], (四二) フグとスルメ[R]
A・E・R・S・T	1913	雑聞雑話	302	626-627	(四三) 鳥が隠亡[宮川久次郎談]

れている。これらはいずれも「話の種」に類似するオムニバス形式のコラム記事で、各話題の最後に執筆者のイニシャルがカッコ書きで署名されている。「随聞随録」連載の冒頭では「話の種は一定しない、語る人も亦一定せぬ。唯聴手―書手―文が定まつて居る。アルファベットの順にならべると、B・E・R・S・Tの五人である」(B・E・R・S・T, 1912), そして「雑聞雑話」連載の冒頭では「昨年の暮になつてB・E・R・S・T黨が解散しました。事情あつて仲間の二人が脱けた爲なのです。それが、春になつて、残黨が顔を合せた時、再び結社の相談が持ち上りました。恰もよし、A君とT君とから、助勢してもよいといふ申出があつたので、茲に、目出度、A・E・R・S・T黨の組織が出来上りました」(A・E・R・S・T, 1913)とあるので、「話の種」執筆前の永澤が複数の人物が寄り合つて話題提供するコラムとして企画した可能性が高い。記事を一覧すると最も執筆が多いのはイニシャル「R」の人物で、おそらくこれが「六郎」を意味するのではないだろうか(金子之史氏のご教示による)。これらの記事についても検索が容易となるように表2としてまとめ、備考欄に内容を書き留めておく。

3. ペンネームの起源について

永澤はどのような経緯で「N.S.生」や「南北生」のペンネームを使用したのであろうか。『動物学雑誌』所収のすべての文献を一覧すると、これらのペンネームの初出は1911年の277号の質疑応答欄にある「日本語を以てのみ発表せる新種命名は先取権なるか」の質問者「N.S.」としてであり、なんとこの質問に回答しているのは永澤六郎である(N.S.・永澤, 1911)。翌年293号の同じく質疑応答欄では「人名を動物学名に転用する時の語尾のiは一つか二つか」という内容の質問が「N.S.生」によって発せられており、寺尾新が回答している(N.S.生・寺尾, 1912)。こうしてみると編集者本人が質問をするというのは不自然であるから、「N.S.」や「N.S.生」は永澤とは別人であると疑いたくなる。しかし1911年は永澤が『動物学雑誌』の編集担当となった初年で、様々な雑誌スタイルの改編が行われたこともあり、質疑応答欄についても活発化を目論んでペンネームを使って質問し、自身で回答するという自作自演の経緯があったのではなかろうかと推測する。

「N.S.」の由来についても詳しいことは不明である

が、イニシャルだとすれば「R.N.」となるだろうから、「永澤(NagaSawa)」からとったものだろうか。あるいは後に「南北生」のペンネームを使用しているから「North South」が由来であるようにも思える。一方、永澤の出身地として大島(1967)が回想している「宮城県古川町」には「馬放街道南北」という地名がある。当時の「〇〇生」と銘打ったペンネームには出身地に由来するものも多々あるので、今後詳しく調査する必要があるだろう。

4. 関連するその他の事柄

またこのペンネームが別人によっても使用されている可能性についても付記しておく。1906年から1910年にかけて、『商業界』や『商工世界太平洋』という雑誌に「東西南北生」の名義で記事を執筆した人物があることが国立国会図書館のデータベースに見て取れる。いずれも北米や南米への日本人移民の活動に関するタイトルが付されており、後にカナダに移住して新聞を編集することになる永澤を連想させる。ところが、この年代は永澤にとって帝国大学入学前から3年次、現在でいうと大学学部生から修士課程に相当し、このころから雑誌に評論記事を執筆したとは考えにくい。また上記「東西南北生」と同じペンネームは1912年から米国サンフランシスコにおける日本語新聞『日米』の一面コラム執筆者としても見つかった。しかも1914年の記事の署名は「南北生」と短縮されている。同じく永澤は帝国大学で『動物学雑誌』の編集に従事している最中であることから、彼の仕事であるとは考え難い。

さらに類似する人物は日本力行会の機関紙『力行世界』においてその名が見受けられ、1913年の力行会会長・島貫兵太夫への追悼文では「東西南北の人」の署名で米国シアトルの日本語新聞『大北日報』の所属となっている。先に述べた『日米』の「東西南北生」がシアトルに移籍したものと考えてもよからう。さらに『力行世界』には1928年5月号と6月号の2回にわたり「長澤六郎」名義の記事「又も東洋人排斥案」があるのだが(長澤, 1928)、この人物は所属が「大陸日報社主筆」と記されているので(図5)、永澤六郎のことと思われる。ただし「永」の字が誤字と考えると2回にわたる記事で連続して間違えられている点が説明できない。誤字は意図的なものか、あるいは長文の記事だったために編集側で2回に分割して連載したという可能性もあるだろう。1930年代以降の同

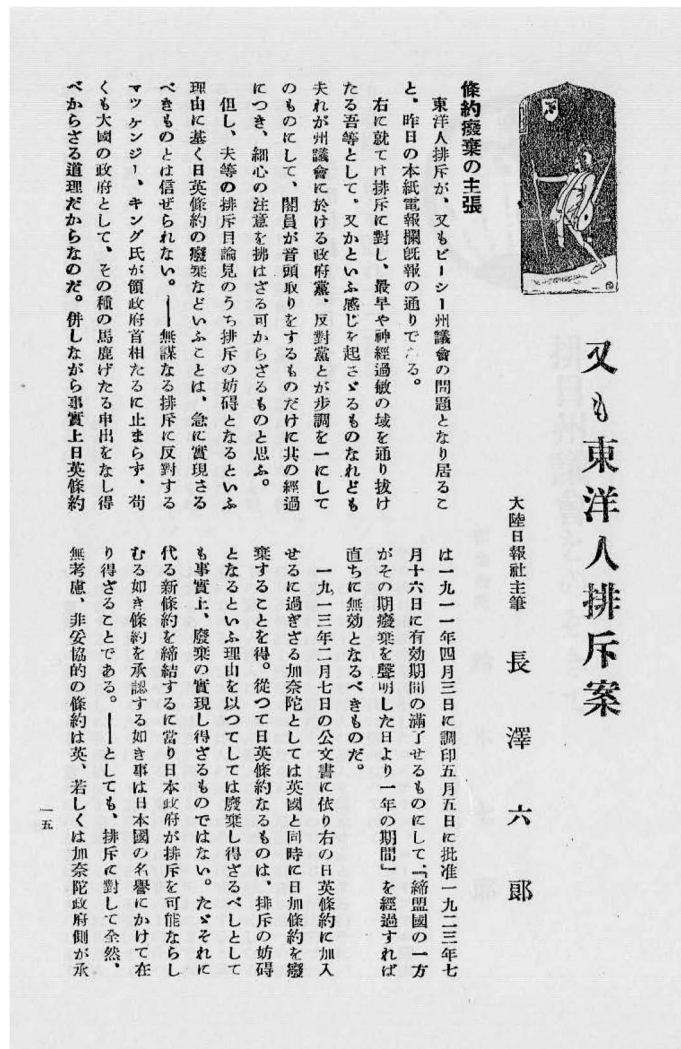


図4. 力行雑誌に掲載された「長澤六郎」という人物による記事。肩書が「大陸日報社主筆」とのことなので永澤六郎に間違いなからう。

誌には「南北生」名義の記事がいくつか見られるが、現在までに知り得ている永澤六郎の人物像との共通性を見出すことはできなかった。

以上これら「南北生」関連の記事については今後の研究課題としたい。「東西南北の人」とは住所が定まらず諸方をさまよう人のことを指し、中国の詩人杜甫のことを指した用例がある（後藤，2009）。永澤は「漢籍に精通し，記事も労働者には逆に読みづらかったのではないか。」（田村，2014）と評されている通り，その著作にたびたび漢詩の一節を引用し，例えば『動物学雑誌』でも永澤（1915a）においては五島清太郎著『日本産ヒトデ

篇』の書評で杜甫の詩の一節を引用して紹介している。これらのペンネームが漢詩に由来し，ひとところにとどまらず文筆の才を発揮する姿を求めたものならば，多発的に複数の人物が使用した可能性も十分にあらう。記事はいずれも日系移民という共通キーワードを持つものであり，複数名の直接交流がある人物同士で使用された可能性もあり，今後研究の価値があるものである。

おわりに

永澤は1941年カナダから帰国した（田村，2003）。

その後京都の「大谷高女」で教員となったが、じきに兵庫県柏原町（現丹波市）に移り住んでその後を過ごしたという。この後に彼が出版の世界に再登場していることは非常に興味深いことである。彼は自身の名前を旧字体から改めた「永沢六郎」名義で、1953年に『佐治川治水略史』という本を執筆している。その冒頭部「編者の言葉」には

「昭和十六年、風来人として柏原市に來住した筆者は、長い間の海外放浪の疲れを休めて居た。其の間に藤井節太郎氏の推挙により、佐治川水害予防組合史の編纂を委嘱された。文筆生活三十余年の経歴を買われたのであつたろう」（永沢、1953）

とある。佐治川は古くから水害に見舞われる川として知られているようで、その地域の水害予防組合の成立から活動全般をまとめるのが趣旨だったようだ。ところがその領域にとどまらず、特に「上篇」とされる部分は佐治川周辺地域の地名の由来から時代的发展にまでをまとめた郷土史であり、かつて動物学においても動物名の由来や研究史にまで広く知識を有した永澤らしい仕事ととれるのではなかろうか。いずれにしてもこの本は491ページにわたる膨大なもので、帰国から10年間の情報収集や調査の成果をまとめた一ジャーナリストの大作といえるものだろう。

永澤が残した文章はカナダの日本語新聞に多数存在することがわかっており、そして帰国してから執筆した『佐治川治水略史』についても詳しい内容は未調査である。今後はこれらについても総覧し、動物学以外の分野における永澤の活動・思想といったところにも注目して研究を進めてみたい。

謝 辞

本稿を執筆するきっかけとなった新聞記事を提供いただいた鈴木一義氏に御礼申し上げる。在カナダ時代の永澤については東京経済大学名誉教授の田村紀雄氏から、未発表の情報も提供いただいた。香川大学名誉教授の金子之史氏からは『動物学雑誌』での「B・E・R・S・T」名義の記事について、「R」が永澤ではないかとの示唆をいただいた。資料の調査は主として国立科学博物館図書室及び国立国会図書館にて行った。これらの館で資料の整理に携わる皆様に感謝申し上げる。

本研究は文部科学省科学研究費基盤C（課題番号：23501232, 26350373, 17K01190）の助成を受けて行われた一連の資料調査に基づいている。

引用文献

- A・E・R・S・T, 1913. 雑聞雑話. 動物学雑誌 (25): 115–117.
 B・E・R・S・T, 1912. 随聞随録. 動物学雑誌 (24): 105–110.
 某・永澤六郎, 1915. 問十三. 動物学雑誌 (27): 229–231.
 江崎悌三, 1933. 京都『昆虫学雑誌』発刊当時の秘話. 関西昆虫雑誌 (1): 19–31.
 後藤秋正, 2009. 「東西南北の人」について—杜甫と高適の酬和詩を中心に. 中国文化 (67): 58–71.
 林 真理, 2000. 『動物学雑誌』初期の目的と成果—明治時代日本における動物学研究の一断面—. 生物学史研究 (66): 1–13.
 平坂恭介, 1940. 其の頃の熊さん. 動物学雑誌 (52): 353–355.
 本間義治, 2002. 平坂恭介先生の海生哺乳類研究. 日本海セトロジー研究 (12): 35–40.
 Hornaday, W. T. 1912. Our pigmy hippopotami. Zoological Society Bulletin 16: 877–879.
 朴澤三二, 1940. 青木熊吉翁の喜壽の機会を祝して. 動物学雑誌 (52): 350–351.
 磯野直秀, 1988. 三崎臨海実験所を去来した人たち. 日本における動物学の誕生. 学会出版センター, 東京. 230 pp.
 川田伸一郎, 2016. アラン・オーストン基礎資料. 山階鳥学雑誌 (47): 59–93.
 Locy, W. A. 1908. Biology and Its Makers. Henry Holt and Company, New York. 469 pp.
 本川雅治・于 宏燦, 2015. 臺北帝国大学の動物学研究：青木文一郎と哺乳類標本. タクサ (39): 25–39.
 無署名, 1907. 會報. 動物学雑誌 (19): 318.
 無署名, 1908. 動物科二年生. 動物学雑誌 (20): 354.
 無署名, 1910a. 動物學科卒業生. 動物学雑誌 (21): 404–405.
 無署名, 1910b. 東京動物學會記事. 動物学雑誌 (22): 593–594.
 無署名, 1914a. 評議員會. 動物学雑誌 (26): 56.
 無署名, 1914b. 動物學雑誌編輯委員更迭. 動物学雑誌 (26): 224.
 無署名, 1915a. 役員更任. 動物学雑誌 (27): 46.
 無署名, 1915b. 學會記事. 動物学雑誌 (27): 108.
 無署名, 1917. 役員改選. 動物学雑誌 (29): 27.
 永澤六郎, 1910a. 前鰓類腎臓の相同に就て. 動物学雑誌 (22): 295–301.
 永澤六郎, 1910b. 進化論者の一空想. 動物学雑誌 (22): 346–352.
 永澤六郎, 1911a. 臨海俱樂部. 動物学雑誌 (23): 594–595.

- 永澤六郎, 1911b. 欧州の生物學實驗所. 動物学雑誌 (23): 395–409, 441–458, 554–572.
- 永澤六郎, 1912. 矮小なる河馬. 動物学雑誌 (24): 642–644.
- 永澤六郎, 1915a. 理學博士五島清太郎著『日本産ヒトデ篇』. 動物学雑誌 (27): 105–106.
- 永澤六郎, 1915b. 「オカピ」角を有するか. 動物学雑誌 (27): 466–467.
- 永澤六郎, 1916. 故アラン・オーストン君. 動物学雑誌 (28): 前3–前4.
- 永澤六郎, 1917a. 鯨の種類. 教育画報3 (6): 169–173.
- 永澤六郎, 1917b. 海産貝類のいろいろ. 教育画報4 (7): 240–244.
- 長澤六郎, 1928. 又も東洋人排斥案. 力行雑誌 (281): 15–16, (282): 25–29.
- 永沢六郎, 1953. 佐治川治水略史. 佐治川水害予防組合, 柏原町 (兵庫). 491 pp.
- 南北生, 1914–1917. 生物學の歴史. 動物学雑誌26: 付録67–78, 付録89–104; 動物学雑誌27: 後1–後12, 後47–後52, 後59–後62, 後63–68; 動物学雑誌29: 後33–後36.
- 南北生, 1925. 世間話, 奇遇. 大陸日報1925年1月1日: 1.
- 南北生, 1929. 世間話. 大陸日報1929年5月4日: 1.
- 日本動物学会, 1911. 動物學雜誌第二十三卷總目録. 動物学雑誌 (23): 付録.
- 日本動物学会, 1915. 動物學雜誌第二十七卷總目録. 動物学雑誌 (27): 付録.
- 日本動物学会, 1929. 動物学雑誌總目録, 第壹卷–第四拾卷. 日本動物学会, 東京. 224 pp.
- N.S.・永澤六郎, 1911. 日本文を以てのみ発表せる新種命名は先取權なるか. 動物学雑誌 (23): 662.
- N.S.生, 1914a. 話の種其の一. 動物学雑誌 (26): 283–284.
- N.S.生, 1914b. 話の種 (十四). 動物学雑誌 (27): 605–609.
- N.S.生・寺尾 新, 1912. 問八. 動物学雑誌 (24): 375.
- 大島 廣, 1967. 三崎の熊さん. 新教出版社, 東京. 342 pp.
- 佐藤 伝・佐藤英子, 1969. 子どもと共に五十年, カナダ日系教育私記. 日本出版貿易, 東京. 644 pp.
- Schomburgk, H. 1912. On the trail of the pigmy hippo. Zoological Society Bulletin 16: 880–884.
- 高島春雄, 1958. 珍しい動物たち. 社会思想研究会出版部, 東京. 126 pp.
- 田村紀雄, 2002. カナダに漂着した日本人, リトルトウキョウ風説書. 芙蓉書房出版, 東京. 230 pp.
- 田村紀雄, 2003. エスニック・ジャーナリズム—日系カナダ人, その言論の勝利. 柏書房, 東京. 389 pp.
- 田村紀雄, 2014. 日本人移民はこうして「カナダ人」になった: 『日刊民衆』を武器とした日本人ネットワーク. 芙蓉書房出版, 東京. 293 pp.
- て, 1910. 春の三崎. 動物学雑誌 (259): 320–321.
- 東京帝国大学, 1907. 東京帝國大學一覽, 従明治四十年至明治四十一年. アクセス: 2022年1月13日; <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813183>.
- 東京帝国大学, 1908. 東京帝國大學一覽, 従明治四十一年至明治四十二年. アクセス: 2022年1月13日; <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813184>.
- 東京帝国大学, 1909. 東京帝國大學一覽, 従明治四十二年至明治四十三年. アクセス: 2022年1月13日; <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813185>.
- 東京帝国大学, 1910. 東京帝國大學一覽, 従明治四十三年至明治四十四年. アクセス: 2022年1月13日; <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813186>.
- 東京帝国大学, 1911. 東京帝國大學一覽, 従明治四十四年至明治四十五年. アクセス: 2022年1月13日; <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813187>.
- 東京帝国大学, 1912. 東京帝國大學一覽, 従大正元年至大正二年. アクセス: 2022年1月13日; <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/940163>.
- 東京帝国大学, 1913. 東京帝國大學一覽, 従大正二年至大正三年. アクセス: 2022年1月13日; <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/940164>.
- 宇仁義和, 2016. 日本の近代鯨類学草創期における東洋捕鯨とアンドリュースの影響. 日本セトロロジー研究 (26): 17–25.
- 谷津直秀, 1917. 會員諸氏に告ぐ. 動物学雑誌 (29): 156.

付表1 永澤六郎名義の『動物学雑誌』記事一覧。無署名で掲載されているが、総目録で「永澤」と記されているものを含む。

署名	年	タイトル	記事類別	号	ページ
永澤六郎	1910	前鰓類腎臓の相同に就て	総説	259	295-301
永澤六郎	1910	進化論者の一空想	評論	260	346-352
無署名	1911	新築東京帝國大學理科大學動物學教室	口絵解説	267	巻頭口絵
無署名	1911	東京帝國大學理科大學動物附屬臨海實驗所	口絵解説	268	巻頭口絵
無署名	1911	ホイットマン教授(Prof. Charles Otis Whitman)略歴	口絵解説	269	巻頭口絵
永澤六郎	1911	日本動物	新著紹介	270	228
永澤六郎	1911	日本動物	新著紹介	272	356
永澤六郎	1911	新着論文	新著紹介	272	357
永澤六郎	1911	日本産魚類図説	新著紹介	272	357
無署名	1911	『ナポリ』實驗所及『モナコ』博物館	口絵解説	273	巻頭口絵
永澤六郎	1911	欧州の生物學實驗所 (一)	総説	273	395-409
永澤六郎	1911	獣医学士内田清之助 鵜類図説	新著紹介	273	428
永澤六郎	1911	新著論文	新著紹介	273	429
永澤六郎	1911	日本動物	新著紹介	273	429
永澤六郎	1911	日本産魚類図説第二巻	新著紹介	273	429-430
永澤六郎	1911	欧州の生物學實驗所 (二)	総説	274	441-458
永澤六郎	1911	日本動物	新著紹介	274	478
永澤六郎	1911	日本産魚類図説第三巻	新著紹介	274	479
永澤六郎	1911	牡蠣の害敵と疾病	論文抄録	275	516-520
永澤六郎	1911	新著論文	新著紹介	275	529-530
永澤六郎	1911	欧州の生物學實驗所 (三)	総説	276	554-572
永澤六郎	1911	三崎便り	学会記事	276	593-594
永澤六郎	1911	臨海俱樂部	学会記事	276	594-595
永澤六郎	1911	飯島教授肖像 (附『回顧二十五年』)	口絵解説	277	巻頭口絵
永澤&N. S.	1911	日本語を以てのみ発表せる新種命名は先取権なるか	質疑応答	277	662
永澤六郎	1911	編輯席より	学会記事	278	724-725
永澤六郎	1912	紐育動物園	伝記	282	211-220
永澤六郎	1912	小水族展覽装置	論説	282	248-249
永澤六郎	1912	世界の動物園所在地	論説	283	301-303
永澤六郎	1912	日本動物	新著紹介	283	314
永澤六郎	1912	日本産魚類図説第四一第六巻	新著紹介	283	315-317
永澤六郎	1912	水産養殖學	新著紹介	283	317
永澤六郎	1912	狩猟に於ける獣皮・骨・角の處置	論文抄録	284	355-356
永澤	1912	「介」と「貝」	質疑応答	284	372
永澤	1912	長者貝の種類及産地	質疑応答	284	372-373
永澤	1912	長者貝殻は何故清潔か	質疑応答	284	373-375
永澤六郎	1912	日本動物	新著紹介	284	376
永澤六郎	1912	モンゴメリー逝く	伝記	285	430
永澤六郎	1912	「ペンギン」の羽衣脱更	論説	286	巻頭
永澤六郎	1912	鴈貝類の岩石を穿つ作用は、器械的・化学的何れに属するものなるか	質疑応答	286	476-477
永澤六郎	1912	窓硝子の代用に用いられたる貝殻	質疑応答	286	477-478
永澤六郎	1912	日本産遊離性多毛環蟲篇 (英文)	新著紹介	286	481-482
永澤六郎	1912	矮小なる河馬	論説	289	642-644
永澤六郎	1913	自然界に於る矛盾の一例	論文抄録	292	101
永澤六郎	1913	後の祭り	論説	292	110-112
永澤六郎	1913	醫學博士宮島幹之助閣理学士小泉丹著 人體規制動物學	論文抄録	292	119-120
永澤六郎	1913	理學博士飯島魁岡吉田貞雄著 人體規制動物學	論文抄録	292	120-121
永澤六郎	1913	農学士徳田義信著 蜜蜂	論文抄録	292	121-122
永澤六郎	1913	西村酔夢著 鳥の一年	論文抄録	292	122
永澤六郎	1913	理学士田中茂穂著 日本産魚類図説七一十巻	論文抄録	292	122-124
永澤六郎	1913	魚學雜誌	論文抄録	292	124
永澤	1913	三崎短信	学会記事	292	124-125
永澤六郎	1913	第一回萬國人種改良會議講演要旨	論文抄録	293	167-173
永澤六郎	1913	日本産槌鯨類二種 附 赤坊鯨	論説	293	178-182
永澤六郎	1913	日本産逆戟と Grampus と	論説	293	184-188
永澤	1913	問二 肺魚類の呼吸法及乾季蟄居法を承りたし	質疑応答	293	190-192
永澤	1913	問三 蠕形動物の蠕は「ゼン」「ジュ」何れに讀むが正しく候や	質疑応答	293	192
永澤六郎	1913	日本の頭足動物界	論文抄録	294	213-214
永澤六郎	1913	動物色彩論の証明実験	論文抄録	294	214-215
永澤六郎	1913	学名先取権制限問題	論説	294	219-222
永澤六郎	1913	系圖書方標準案	論説	294	225-228
青木・永澤	1913	ムジナの属名は Taxidea なりや、	質疑応答	294	241-242

付表1 続き

署名	年	タイトル	記事類別	号	ページ
永澤	1913	南満州の日本人の鸚鵡とは	質疑応答	294	242
永澤	1913	Partridgeとは鸚鵡?	質疑応答	294	242
永澤六郎	1913	魚学雑誌第一號	新著紹介	294	243-244
永澤六郎	1913	理學博士飯島魁校閏 生熊興一郎著 動物標本及模型製作法	新著紹介	294	244
永澤六郎	1913	三千餘代のザウリムシの總體積は地球の容積の幾倍 (再算)	論説	295	296-298
永澤	1913	二枚貝の左右は如何にして定むべきか	質疑応答	296	358
永澤	1913	帆立貝の貝殻は深き方が右か左か	質疑応答	296	358-359
永澤	1913	帆立貝は左右何れを下にして横はるか	質疑応答	296	359
永澤	1913	水産動物学研究参考書として「日本水産動物学」と「海産動物学」と何れを選ぶべきか	質疑応答	296	359
永澤六郎	1913	理學博士石川千代松著 動物学講義上巻	新著紹介	298	431-433
永澤六郎	1913	狸々の巢	論説	299	巻頭口絵
永澤六郎	1913	害蟲駆除雜報	論説	299	470-473
永澤	1913	海狗とは何か	質疑応答	299	484
永澤六郎	1913	最近に現れたる三目録	新著紹介	299	484-486
永澤六郎	1913	小島美津次著 博物学研究指針	新著紹介	299	486
永澤六郎	1913	理學博士飯島魁校閏 獣医学士内田清之助著 日本鳥類図説上巻	新著紹介	300	539-540
永澤六郎	1914	アントニー・ヴァン・レーウエンフーク	伝記	308	巻頭口絵
永澤六郎	1914	Anlage 其他三四の譯語	論説	308	332-333
永澤六郎	1914	テイチアノ作アンドレイヴェザールの肖像に對して	伝記	314	巻頭口絵
永澤六郎	1915	カール・フォン・リネー (Carl von Linne)	伝記	315	前1-4
永澤六郎	1915	朝鮮哺乳類目録	論文抄録	315	26-27
永澤六郎	1915	蘇蟲類の麻醉固定法	論文抄録	315	27
永澤六郎	1915	海水の重要な未知成分	論文抄録	315	27-28
永澤六郎	1915	日本産ゴカイ類四種の學名	論文抄録	315	28-29
永澤六郎	1915	理學博士丘浅次郎著『増補進化論講話』	新著紹介	315	44-45
永澤	1915	學術論文著者名書方	論説	315	45
永澤	1915	日本鳥學會の發展	論説	315	45-46
永澤六郎	1915	淡水魚の食物と適應性	論文抄録	316	86-87
永澤六郎	1915	日本産ヒトデ篇	論文抄録	316	87-90
永澤六郎	1915	日本産浮遊環蟲類	論文抄録	316	90
永澤六郎	1915	日本産棘皮動物数種の發生	論文抄録	316	90-91
永澤六郎	1915	東印度諸島産白蟻	論文抄録	316	91
永澤六郎	1915	新着邦文論説抄 (新著紹介覧参照)	論文抄録	316	91-92
永澤六郎	1915	ハツカネズミといふ和名は古来日本に在りしものか、又西洋語の翻譯なるか	質疑応答	316	104
永澤六郎	1915	理學博士五島清太郎著『日本産ヒトデ篇』	新著紹介	316	105-106
永澤六郎	1915	理學士西川藤吉遺著『真珠』	新著紹介	316	106-107
永澤六郎	1915	日本白亜紀の三角貝	論文抄録	317	154
永澤六郎	1915	日本産昆蟲の三新種	論文抄録	317	154
永澤六郎	1915	新着邦文論説鈔	論文抄録	317	154-156
永澤六郎	1915	「ラスボラ」オ子を食はぬか	論説	317	167
永澤六郎	1915	理學士田中茂穂著『普通動物圖譜』	新著紹介	317	173-174
永澤六郎	1915	昆蟲學雜誌第一號	新著紹介	317	174-175
永澤六郎	1915	理學士田中茂穂著『日本産魚類圖説』第十九卷	新著紹介	317	175
永澤六郎	1915	農學博士麻生慶次郎閏 農學士關根恒三譯『生理化學實驗法』	新著紹介	317	175
永澤六郎	1915	東西兩京の昆蟲學會	論説	317	175
永澤六郎	1915	蜥蜴の體温と外界の温度と	論文抄録	318	312-313
永澤六郎	1915	西印度諸島の動物界	論文抄録	318	313
永澤六郎	1915	日本産ナマコ類目録	論文抄録	318	313
永澤六郎	1915	新着邦文論説鈔	論文抄録	318	214
永澤六郎	1915	魚類測定器	論説	318	222-223
永澤六郎	1915	ヲシドリに充つべき漢字は	質疑応答	318	229-231
永澤六郎	1915	飯島理學博士監修 中西準太郎編纂『動物辞典』	新著紹介	318	232-233
永澤六郎	1915	農學士田中長三郎著『遺傳學教科書』	新著紹介	318	233
永澤六郎	1915	平瀬一郎編輯『貝千種』第二輯	新著紹介	318	233
永澤六郎	1915	上水道中に現はるる動物及其遮断並に駆除	論文抄録	319	279-281
永澤六郎	1915	海産動物の呼吸と栄養量	論文抄録	319	281-282
永澤六郎	1915	「ロブスター」の絶食と其栄養	論文抄録	319	282-283
永澤六郎	1915	環蟲體內の囊狀體	論文抄録	319	284
永澤六郎	1915	両性のナメクジウヲ及ナメクジウヲの幼蟲	論文抄録	319	284
永澤六郎	1915	朝鮮産浮塵子の新属真珠	論文抄録	319	284-285
永澤六郎	1915	日本産烏賊の四新種	論文抄録	319	285

付表1 続き

署名	年	タイトル	記事類別	号	ページ
永澤六郎	1915	新着邦文論説鈔	論文抄録	319	285-286
永澤六郎	1915	顕微鏡拭に日本紙	論説	319	293
永澤六郎	1915	倫敦及紐育の動物学会	論説	319	294-295
永澤六郎	1915	白鼠の生殖腺摘出と其影響	論文抄録	320	348-349
永澤六郎	1915	日本産白蟻の種名及其分布	論文抄録	320	349-351
永澤六郎	1915	クモヒトデ類新分類法並に日本産クモヒトデの新属新種	論文抄録	320	351-352
永澤六郎	1915	新着邦文論説鈔	論文抄録	320	352-353
永澤六郎	1915	鴨とマラリア	論説	320	357
永澤六郎	1915	日本鳥学会発行『鳥』第一號	新著紹介	320	362-363
永澤六郎	1915	アーンリ・ドウ・ラカーズ=デューティエーの事業	伝記	321	前23-26
永澤六郎	1915	サバ・サハラ・シビ類の新分類法並に其日本近海産の学名	論文抄録	321	402-403
永澤六郎	1915	日本産蝶類の新種	論文抄録	321	403
永澤六郎	1915	南洋産蝶類の新種	論文抄録	321	403
永澤六郎	1915	日本・朝鮮及支那産化石珊瑚類	論文抄録	321	403
永澤六郎	1915	新着邦文論説鈔	論文抄録	321	403-404
永澤六郎	1915	日本近海産鯨類十四種の學名	論説	321	404-410
永澤六郎	1915	理學士寺尾新編『ダーキンの進化論』	新著紹介	321	418
永澤六郎	1915	『昆蟲學雜誌』第二號	新著紹介	321	418
永澤六郎	1915	『水産學會報』第一號	新著紹介	321	418-419
永澤六郎	1915	理學博士松村松年著『大日本害蟲全書』後編	新著紹介	321	419
永澤六郎	1915	理學士青木文一郎著『日本産鼠科』	新著紹介	321	419
永澤	1915	水産學會	論説	321	419
永澤	1915	桑港に於る學術勸大會	論説	321	419-420
永澤六郎	1915	アーンリ・ミル=ネドワールの生涯	伝記	322	前27-30
永澤六郎	1915	兎鯨の習性・形態並に類縁	論文抄録	322	451-452
永澤六郎	1915	骨片の綿火薬濾過蒐集集法	論文抄録	322	452-453
永澤六郎	1915	ヤスデ類に寄生する新族蟲	論文抄録	322	456
永澤六郎	1915	日本産蛭蜻蛉亜科	論文抄録	322	456
永澤六郎	1915	日本産ハムシ類	論文抄録	322	456
永澤六郎	1915	新着邦文論説鈔	論文抄録	322	456-457
永澤六郎	1915	北韓の悪獸「ヌクテ」	論説	322	460-463
永澤六郎	1915	再び顕微鏡拭日本紙に就て	論説	322	465
永澤六郎	1915	「オカビ」角を有するか	論説	322	466-467
永澤六郎	1915	理學士青木文一郎著『日本産鼠科』	新著紹介	322	470
永澤六郎	1915	ビュッフォン小傳	伝記	323	前31-32
永澤六郎	1915	軟體動物歯舌染色新法	論文抄録	323	494
永澤六郎	1915	日本産白蟻に寄生する「トリコニムフ」類	論文抄録	323	494-495
永澤六郎	1915	日本産魚類の新属新種	論文抄録	323	495
永澤六郎	1915	新着邦文論説鈔	論文抄録	323	495
永澤六郎	1915	鰐魚の巢と卵	論説	323	509-510
永澤六郎	1915	『第五回白蟻調査報告』	新著紹介	323	515-516
永澤六郎	1915	理學士田中茂穂著『日本産語類図説』第二十卷	新著紹介	323	516
永澤六郎	1915	石川教授と吾學會	伝記	324	前33-34
永澤六郎	1915	洞窟動物盲目の由来及盲魚人工産出試験	論文抄録	324	546-547
永澤六郎	1915	生物の向日性に對するスペクトルの有効部分	論文抄録	324	547
永澤六郎	1915	溝貝の水中溶解脂肪吸収	論文抄録	324	548
永澤六郎	1915	活きたる赤血球の保育	論文抄録	324	548
永澤六郎	1915	日本・朝鮮・支那産化石珊瑚類	論文抄録	324	550
永澤六郎	1915	日本産菊石の一新種	論文抄録	324	550
永澤六郎	1915	新着邦文論説鈔	論文抄録	324	550-551
永澤六郎	1915	日本産貝類の十五新種	論文抄録	325	595
永澤六郎	1915	日本朝鮮及支那産化石珊瑚類	論文抄録	325	595
永澤六郎	1915	新着邦文論説鈔	論文抄録	325	595-596
永澤六郎	1915	『動物辞典』批評の訂正	新著紹介	325	610-613
永澤六郎	1915	日本及支那産化石哺乳類	論文抄録	326	633-634
永澤六郎	1915	日本産貝類の八新種	論文抄録	326	634
永澤六郎	1915	日本産鳥類の二新亜種	論文抄録	326	634-635
永澤六郎	1915	日本産水棲半翅類の十一新種	論文抄録	326	635
永澤六郎	1915	日本産蜻蛉の新種	論文抄録	326	635
永澤六郎	1915	新着邦文論説鈔	論文抄録	326	635-636
永澤六郎	1915	シワリック猿人、人乎猿乎	論説	326	644-645
永澤	1915	日本住血吸蟲中間宿主たる巻貝の學名を承りたし。	質疑応答	326	653
永澤六郎	1915	谷津直秀序 阿部余四男著『現代の遺傳進化學』	新著紹介	326	653-654

付表1 続き

署名	年	タイトル	記事類別	号	ページ
永澤六郎	1915	獣医学士内田清之助著『日本鳥類圖説』続篇	新著紹介	326	654
永澤六郎	1915	「昆蟲学雑誌」第三號	新著紹介	326	654
永澤六郎	1916	ジョフロア・サン・ティレール	伝記	327	前1-前2
永澤六郎	1916	郭公の蕃殖に関する研究	論文抄録	327	33-34
永澤六郎	1916	近着邦文論説鈔 (一)	論文抄録	327	34
永澤六郎	1916	日本産海豚類十一種の學名	論説	327	35-39
永澤六郎	1916	日本産鯨類の學名 (再び)	論説	327	45-47
永澤六郎	1916	『水産學會報』第二號	新著紹介	327	51
永澤六郎	1916	理學博士松村松年著『昆蟲分類學』下巻	新著紹介	327	51
永澤六郎	1916	『鳥』第二號	新著紹介	327	51-52
永澤六郎	1916	仁部富之助著『郭公の蕃殖に関する研究』	新著紹介	327	52
編輯委員	1916	寄稿諸氏に告ぐ	学会記事	327	53
編輯委員	1916	會員諸氏に訴ふ	学会記事	327	53
永澤六郎	1916	故アラン・オーストン君	伝記	328	前3-前4
永澤六郎	1916	ビルトダウン原人下顎の本体	論文抄録	328	71-73
永澤六郎	1916	ラヂウム輻射線の動物原形質に及ぼす影響	論文抄録	328	73-74
永澤六郎	1916	日本産魚類の一新種	論文抄録	328	75
永澤六郎	1916	日本産蟻類の一新種	論文抄録	328	75
永澤六郎	1916	シジミテフの一新變種	論文抄録	328	75
永澤六郎	1916	日本産蜻蛉の一新種	論文抄録	328	75
永澤六郎	1916	近着邦文論説鈔 (二)	論文抄録	328	75
編輯委員	1916	「引用文献を掲ぐべき最適の場所」(大島)に対するコメント	論説	328	79
永澤六郎	1916	類人猿の學名	論説	328	86-87
永澤六郎	1916	理學士田中茂穂著『日本産魚類圖説』第二十一巻	新著紹介	328	90
永澤六郎	1916	エドワード・ドリンカー・コープ小傳	伝記	329	前5-前6
永澤六郎	1916	ザウリムシの耐熱力と鹽類溶液と	論文抄録	329	109
永澤六郎	1916	日本産鱗翅類の新属新種	論文抄録	329	109
永澤六郎	1916	近着邦文論説鈔 (三)	論文抄録	329	109-111
永澤六郎	1916	鷺と子牙と	論説	329	120-121
永澤六郎	1916	縦書邦文註脚の記入方式	論説	329	121-122
永澤六郎	1916	新設熱帯動物實驗所	論説	329	124
永澤六郎	1916	故松原新之助先生	伝記	330	前9-前10
永澤六郎	1916	日本産魚類の新属新種	論文抄録	330	146
永澤六郎	1916	近着邦文論説鈔 (四)	論文抄録	330	146-147
永澤六郎	1916	クロード・ベルナル	伝記	331	前11-前12
永澤六郎	1916	琵琶湖産淡水貝七種の學名	論文抄録	331	176
永澤六郎	1916	日本産有用食蚜蠅の新種	論文抄録	331	177
永澤六郎	1916	日本朝鮮及支那産化石珊瑚類	論文抄録	331	177
永澤六郎	1916	美濃産化石鹿の一新種	論文抄録	331	177
永澤六郎	1916	近着邦文論説鈔 (五)	論文抄録	331	177-178
永澤六郎	1916	縦書き邦文註脚記入法式 (追記)	論文抄録	331	191
永澤六郎	1916	バストゥールの生涯と其事業	伝記	332	前13-前20
永澤六郎	1916	蜘蛛の趨振性	論文抄録	332	232
永澤六郎	1916	人工培養法によつて研究せる雄性生殖細胞の小絲粒 (ミトコンドリア)	論文抄録	332	232-233
永澤六郎	1916	橈脚類の栄養	論文抄録	332	233
永澤六郎	1916	日本領内産鹿類の學名	論文抄録	332	233-234
永澤六郎	1916	日本産魚類の新種	論文抄録	332	234
永澤六郎	1916	近着邦文論説鈔 (六)	論文抄録	332	235-236
永澤六郎	1916	有孔蟲研究にX線	論説	332	239
永澤六郎	1916	類人猿の學名 (再び)	論説	332	240-241
永澤六郎	1916	日本猿の属名	論説	332	241-242
永澤六郎	1916	『日本産魚類図説』第二十二巻	新著紹介	332	245
編輯委員	1916	寄者諸氏に告ぐ	学会記事	332	246
永澤六郎	1916	古生物學者マーシュ	伝記	333	前21-前22
永澤六郎	1916	クマネズミ属の属名	論文抄録	333	269
永澤六郎	1916	日本産鱗翅類論	論文抄録	333	269-270
永澤六郎	1916	日本産海百合の三新種	論文抄録	333	270
永澤六郎	1916	日本産ハムシ類	論文抄録	333	270
永澤六郎	1916	日本産開眼頭足類	論文抄録	333	270
永澤六郎	1916	雲南産鳥類目録	論文抄録	333	270
永澤六郎	1916	日本産カヒガラムシの新属新種	論文抄録	333	270
永澤六郎	1916	日本産三岐腸渦蟲の新種	論文抄録	333	270-271
永澤六郎	1916	近着邦文論説鈔 (七)	論文抄録	333	271

付表1 続き

署名	年	タイトル	記事類別	号	ページ
永澤六郎	1916	理學士田中茂穂著『日本産魚類圖説』第二十三卷	新著紹介	333	281
永澤六郎	1916	法學士川口孫治郎著『杜鵑研究』	新著紹介	333	281-282
永澤六郎	1916	エーレンベルグ	伝記	334	前23-前24
永澤六郎	1916	「アメーバ」の運動と核と	論文抄録	334	315-316
永澤六郎	1916	琵琶湖産海綿類論	論文抄録	334	316
永澤六郎	1916	日本産双翅目の新属新種	論文抄録	334	317
永澤六郎	1916	日本産尖蟻の一新種	論文抄録	334	317
永澤六郎	1916	日本産脈翅類の新属新種	論文抄録	334	317
永澤六郎	1916	日本産天社蛾の一新種	論文抄録	334	317
永澤六郎	1916	近着邦文論説鈔 (八)	論文抄録	334	317-319
永澤六郎	1916	テクニク數種	論説	334	332-333
永澤六郎	1916	理學士松村松年著『新日本千蟲圖解』	新著紹介	334	334
永澤六郎	1916	大英博物館博物館部	伝記	335	前25-前28
永澤六郎	1916	珪酸曹達による輪蟲の種の變換	論文抄録	335	360
永澤六郎	1916	冷血動物の體温と外界の温度と	論文抄録	335	360-361
永澤六郎	1916	近着邦文論説鈔 (九)	論文抄録	335	361-362
永澤六郎	1916	インマーシオン用新液	論説	335	375
永澤六郎	1916	プレバラートに目印を附くる一法	論説	335	376
永澤六郎	1916	レオナルドー・ダ・ヴィンチの解剖圖	伝記	336	前29-前34
永澤六郎	1916	近着邦文論説鈔 (十)	論文抄録	336	404-405
永澤六郎	1916	英国皇立醫學校附属博物館	伝記	337	前35-前38
永澤六郎	1916	日本産石灰海綿の六新種	論文抄録	337	467
永澤六郎	1916	近着邦文論説鈔 (十一)	論文抄録	337	467-470
永澤六郎	1916	クマネズミ属の属名 (再び)	論説	337	477
永澤六郎	1916	動物の血球數	論説	337	482
永澤六郎	1916	船食蟲海底電線を襲ふ	論説	337	483-484
永澤六郎	1916	マルピーギ傳追補	伝記	338	前39-前40
永澤六郎	1916	淡水産水母及其寄生滴蟲類	論文抄録	338	499
永澤六郎	1916	日本及臺灣産大蚊科の新種	論文抄録	338	499-500
永澤六郎	1916	日本産椿象科の二新種	論文抄録	338	500
永澤六郎	1916	近着邦文論説鈔 (十二)	論文抄録	338	500-501
永澤六郎	1916	海象と海馬と	論説	338	519-520
永澤六郎	1916	理學士黒田長禮『臺灣島の鳥界』	新著紹介	338	521
永澤六郎	1917	ハーヴィー傳補遺	伝記	339	前1-前6
永澤六郎	1917	類人猿教育	論文抄録	339	13-15
永澤六郎	1917	氷雪の中に棲む蜥蜴	論文抄録	339	15-16
永澤六郎	1917	温度と生活體と	論文抄録	339	16-17
永澤六郎	1917	日本産魚類の新属新種	論文抄録	339	18
永澤六郎	1917	日本産蠅類の新属新種	論文抄録	339	18
永澤六郎	1917	近着邦文論説鈔 (一)	論文抄録	339	18-19
永澤六郎	1917	古スライドの掃除法	論説	339	21
永澤六郎	1917	『欧米鹹水養殖視察報告』	新著紹介	339	27
永澤六郎	1917	『鳥』第三號	新著紹介	339	27
永澤六郎	1917	ジェームス・スミソン及『スミソン』學園	伝記	340	前7-前14
永澤六郎	1917	新魚高倉海馬	論文抄録	340	49
永澤六郎	1917	近着邦文論説鈔 (二)	論文抄録	340	49-50
永澤六郎	1917	象の現存種	論説	340	54
永澤六郎	1917	『日本産魚類圖説』第二十四卷	新著紹介	340	58
永澤六郎	1917	近着邦文論説鈔 (三)	論文抄録	341	89-91
永澤六郎	1917	『浅海利用調査報告』	新著紹介	341	102
永澤六郎	1917	分類學者ジョン・レー	伝記	343	前17-前21
永澤六郎	1917	アンリ・ドゥ・ブレンヴィル	伝記	344	前23-24